

珍奇なるものから平凡なものへ

——柳田國男における民俗学と民族学の位相

From Novelties to Ordinary Things:
Between Folklore Studies and Ethnology in Yanagita Kunio

岩本 通弥

IWAMOTO, Michiya

序、問題の所在——封じられた『民間伝承論』

柳田國男の民俗学を「偉大なる未完成」(Unfinished but Enduring)¹と呼んだのは、『河童駒引考——比較民族学的研究』(筑摩書房、1948年)や『桃太郎の母——ある文化史的考察』(法政大学出版局、1956年)などで知られる文化人類学者・比較民族学の石田英一郎²である。1954年創設の東京大学文化人類学教室の初代教室主任を務めたのをはじめ、日本における文化人類学・民族学の制度的な土台作りに絶大なる貢献を果たした理論家であり、戦後、柳田邸に設けられていた財団法人・民俗学研究所の解散を惹起させる講演「人類学と日本民俗学」³を行った人物でもある。

その石田が『定本柳田國男集』(以下、『定本』と表記)の「月報」に「柳田先生と人類学」という一文を寄せている。石田をして「広義の人類学者としての柳田先生の高邁な見識と先駆的な見通し」が「もともとよく現れている」⁴と言わしめた『民間伝承論』が、本体の『定本』には序と第1章以外は省かれている事実、改めて注意を喚起してみたい。『民間伝承論』は伝統と現代社版(1980年)や第三書館版(1986年)が上梓され、ちくま文庫版『柳田國男全集』(第28巻、筑摩書房、1990年、以下、『文庫版全集』)や現在編纂中の『柳田國男全集』(第8巻、筑摩書房、1998年、以下、『全集』)にも掲載されているので、筆者などもつい「素人向けの入門書」⁵と自評された『郷土生活の研究法』よりも、専門的なこちらを多く引いてしまうが、『定本』には28ヵ条を簡条書した序と第1章「一国民俗学」だけが掲載され、第2章以下第10章までは、いわば柳田の意図によって焚書扱いられているのだ。『文庫版全集』に全編が採録される1990年までは、民俗学界内部では第2章以下からの引用はタブー視されたような雰囲気が漂っていたと記憶する。1964年から90年までの柳田没後の民俗学の転換期、『民間伝承論』(1934年)は封じられ、『郷土生活の研究法』(1935年)の方が一種、正典化されていたとあって過言でない⁶。

石田が「柳田國男研究者の手でぜひ明らかにしてもらいたい問題の一つは、先生がなぜ後になって、その『民間伝承論』(一九三四年)を自ら“失敗作”などと呼ばれるようになったのかということ」⁷だ

1 その呼び方は、石田英一郎『東西抄——日本・西洋・人間』(筑摩書房、1965年)に収録された「偉大なる未完成——柳田國男における国学と人類学」による(114頁)、この論考はIshida, Eiichirō, 1963, “Un-finished but Enduring — Yanagita Kunio’s Folklore Studies”, *Japan Quarterly*, X-1, pp. 35-42, Asahi Shinbunの翻訳である。ただし、それ以前にも「偉大な未完成」という表現を、『朝日新聞』1962年2月10日付「求道者にも近い研究態度——柳田國男さんと日本民俗学」で用いている(『石田英一郎全集』4巻、筑摩書房、1970年、316頁)。

2 法政大学教授から1951年に東洋文化研究所に転じた石田は、理学部の人類学課程(併任)を経て、教養学部へ配置換となって文化人類学分科を組織した。

3 柳田が研究所の解散を公言したのは、1955年12月4日の代議員会の場で、1954年10月の日本民俗学会年会における石田の、広義の人類学を目指すべきだとした講演(のち「日本民俗学の将来——とくに人類学との関係について」として『日本民俗学』2巻4号、1955年3月に収録)に対し、日本民俗学は広義の日本史であるにも拘らず、石田に反論できないようでは発展は心細く、かかる無力な研究所ならば、いっそ解散すべしと発言したとされる(関敬吾「日本民俗学の歴史」『日本民俗学大系』2巻、1958年、135-136頁)。『定本』年譜には、1955年2月27日に開かれた研究所研究会で、

「学問の前途多難なことを述べ、方法論を確立しようという話をする」と記され、また8月14日の研究所談話会でも「将来に残された日本民俗学の問題について語る」とあり（『定本』別巻5巻、1971年、658頁）、12月の発言が必ずしも唐突なものではなかったことを窺わせる。ただし、研究所の所員であった酒井卯作によれば、研究所解散は石田発言が主要因ではなく、財政的な行き詰まりに起因することが説かれている（『民俗学研究所解散の前後』『伊那民俗研究』22号、2014年）。

4 石田英一郎「柳田先生と人類学」『定本』月報32号、1964年、3頁。

5 柳田2002(1935)『全集』29巻、322頁（以下、柳田の著作引用は、こうした省略形で表記する）。

6 『郷土生活の研究法』も『定本』では後編が省略されるが、後編「民俗資料の分類」を含めた柳田國男「郷土生活の研究」が筑摩書房（1967年）から上梓され、その後しばらく民俗学の入門書および調査の手引書等として使われた。

7 石田前掲4、3頁。

8 石田は『民間伝承論』が「今日といえども、これ以上明確に他の諸学に対する日本民俗学の立場を規定」したものはないと評している（前掲1、1965年、119-120頁）。

9 柳田1998(1934)『全集』8巻、38頁。

10 柳田1998(1934)『全集』8巻、34頁。

11 柳田1998(1934)『全集』8巻、42頁。

12 柳田1998(1934)『全集』8巻、46頁。

とする書き出しで、月報に紙幅いっぱい描いたのは、14箇所にも及ぶ『民間伝承論』⁸からの引用であった。内容の大半を引用が占めるという異例の月報記事となっているが、そこには『民間伝承論』やそこに書かれた事実が抹消されてしまうことを、何とか防ぎたいといった石田の強い意志がひしひしと伝わってくる。とまれ、石田の引用から最初の二つを紹介しておこう（ただし、引用頁は『全集』に依拠した）。

フォクロアが珍奇を書き残すことのみを仕事として居るやうな道楽学問であつたのを、其珍奇が学問上の大法則の一露頭を示すものであることを推測せしめ得たのは、又未開人調査の影響であつたのである。フォクロアとエスノグラフィーとは、最初から深い関係を持つて居たのである。やがてはこの二つの学問が相提携し相合する迄に成長するのであらう希望は存するのである⁹（傍点引用者）

民間伝承論の役目は、単に日本のやうな資料の豊富な一國に、日本民俗学を建設したといふだけで、もう御終ひとなるやうな小さなものであつてはならぬ。……末には此複雑を極めた世界全体を一つとして、是を現在の如くならしめた力と法則とを尋ね出すことも亦決して他の学問の領分では無い筈である¹⁰（以下、……は石田と同様に、中略を示す）

まづもって留意を促したいのは、「珍奇を書き残すことのみを仕事として居」たのは、フォクロアだったことであり、当時の柳田がフレーザーの『旧約全書のフォクロア』を「フォクロアとエスノロジーとの婚約」¹¹だったとして、両者が統合され、「広い意味の人類学が融合して、完全な一つの学問となる」¹²という夢を抱いていたことである。後者は第2章第5節では「世界民俗学の実現へ」¹³とも命名されているが、その当時の柳田の脳裏に、壮大で高遠なる理想が広がっていたことを、石田は見過ごさない。

石田によれば、「不幸にして……この人類学的な見通しは、いわゆる日本民俗学の世界では実を結ばず、一九二〇年代の当時の先生のこの学問的関心は、戦後の日本人の生き方や進む路という、より切実な問題に、それ以上の発展をみなかったともいえる」¹⁴と論じる。戦後は柳田の視線が「より切実な問題」に傾斜していったと捉えるとともに、「にもかかわらず、日本民族の起源とか、稲作文化の系統とかいう問題になると、先生はどのいわゆる民俗学者よりも熱心に、その若い時代からの人類学的な研究を続けられた」¹⁵とするように、『海上の道』（1961年）の諸論考を石田は人類学的だ

と見做している。このように『民間伝承論』や『郷土生活の研究法』という二つの概論書で示された方法論からすれば、たしかにそれらの諸論考は民俗学的でもないし、また「日本人の生き方や進む路という、より切実な問題」とも懸隔のあることを、石田は鋭く見抜いている。付け加えれば、“失敗作”とは、1947年に発表された柳田の「現代科学といふこと」における「自分も十何年か前に一度、『民間伝承論』といふのを書いて見たのだが、是は失敗であつた。筆記のさせ方が悪かつたので誤りが多い。その上に是非言ふべくして言っていないことが幾つか有る。その一つは日本の民俗学が、他の国々の真似をしてはならぬ理由、全体にどの国にも国としての特徴は有るのだが、日本は殊にそれが多い」¹⁶という一節によっている。

『民間伝承論』が省略された形となった理由として、『定本』第25巻の「あとがき」には「第二章以下は自筆にあらざる故に省略した」¹⁷とあり、編纂に携わった柳田高弟の大藤時彦も「口述筆記は……『定本』の編集方針としてはそれらは一切採らなかつた（ただ口述でも、先生が……赤で直されたものは採った）」¹⁸と説明する。しかしながら、『郷土生活の研究法』も、巻頭論文以外は「口述筆記」であつたから¹⁹、その言い方では説得力はないし²⁰、また「失敗」は『明治大正史世相篇』に対しても、自序でそう呼んでいるから²¹、正鵠を射ていない。「筆記のさせ方が悪かつたので誤りが多い」ことも、軽いものならば手直しも効いたであろうから、手直しが効かぬほど²²の躊躇を柳田に惹き起す何かが存在したのだろう。石田が指摘する戦後の柳田の捉え方が変化したこともあるが、「その上に是非言ふべくして言っていないことが幾つか有る」とは何であり、また『郷土生活の研究法』との違いは何だったのか。以下では柳田における民俗学と民族学との関係性の変化について整理を加えることで、石田の問題提起に答えつつ、いわゆる柳田民俗学の形成期の原点をより鮮明化させることを目的としたい。

1920年代と石田は述べているが、『民間伝承論』の発刊は1934年であり、基となった自宅での講義がなされたのも1933年である（1933年9月からの12回の講義を後藤興善が口述筆記した²³）。なぜ石田が1930年代前半と記さなかつたのか。些末なようであるが、これも重要な手掛かりである。柳田は1925年11月に23歳年下の民族学者・岡正雄を編集同人に、また岡の友人であつた少壮の社会学者・有賀喜左衛門や田辺寿利、石田幹之助、奥平武彦の4人を発起人として、隔月刊の雑誌『民族』を創刊する。1929年3月の第4巻第3号まで続くが、その誌名が示しているように、この時期の柳田は民俗学と民族学との区別をさほど距離あるものと捉えていなかった²⁴。創刊号巻頭には浜田耕作の「石金同時代の過渡期の研究に就いて」を掲げたように、目指したのは考古学も含む汎人類学的な雑誌であつ

13 柳田1998(1934)『全集』8巻、45頁。

14 石田前掲4、4頁。

15 石田前掲4、4頁。

16 柳田2004(1947)『全集』31巻、385頁。

17 『定本』25巻、1964年、562頁。

18 大藤時彦『日本民俗学史論』三一書房、1990年、12頁。

19 大藤時彦「解説」前掲6、1967年、247頁。

20 『全集』解題によれば、『郷土生活の研究法』の再版改版本（成城大学民俗学研究所所蔵）は索引前に柳田自身の書き入れがあり、「昭和二十一年五月二十二日一読した……此の本ハもう再版せぬつもり也…各論の部ハ其後考のかはつた点多く此までハ保存しがたし」と記されているという（『全集』8巻、667頁）。

21 柳田1998(1931)『全集』5巻、337頁。

22 大藤時彦によれば、柳田自身が改訂しようとして、木曜会で読み合わせて加筆したことがあつたが、一章だけで中止されたという（大藤「あとがき」柳田國男『民間伝承論』伝統と現代社、1980年、246頁）。

23 後藤によると、第1章は柳田の書いたものがあつたが、「全体との関聯を考慮する為に、その一部を他の章に融通したほか、少部分加除したが大体そのまゝを採」用し、第2章は柳田の「手でできてゐた前半を踏まへ、第二日目の御講義を塩梅」したものだとする。第3章以下は筆記「ノートによりつゝ、先生の数多くの著書及び諸雑誌等に御発表の御研究を涉獵して書いた」が、各章の表題および第4章と第7章の各節

見出しは柳田の示したものを使用したとある(後藤興善「巻末小記」柳田國男「民間伝承論」共立社、1934年、242頁)。講義に参加した大藤によると、後藤の努力によって「先生の意向からはずれたものはまずないといいてもよい」と評されている(前掲22、244頁)。

24 大藤も「先生は、初めのうちは、エスノロジーとフォークロアとの違いというものを、そうひどくその間に差別を設けておられなかった」と述べるのをはじめ、「長い間、自分の学問というものを、人類学、あるいはエスノロジーと名乗っておられた」とも表現している(大藤前掲18、200-201頁)。

25 最近でも文化人類学の立場から、川田牧人が二つのミンゾク学問題を議論している。当時の柳田の認識に「探訪」と「調査」の区分のあったこと、また「日本民族学会は、1929年から33年までは民俗学会と名前を名乗っていたのが名前を変えた。さらにその母体は、エトノスのほうの『民族』という雑誌であった」と述べた点は、真偽はともかく、真新しい(「私は〇〇〇でミンゾク学をやっている」川田牧人編「二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先—グローバルでローカルで複数のフォークロア研究へ」成城大学グローバル研究センター、2016年、13頁)。従来の大藤や福田アジオによる民俗学史では、雑誌「民俗学」や民俗学会は、「民族」の休刊後、岡正雄はじめ、そこに集った少壮の有志らが、折口信夫を担いで発足させた雑誌として(編集発行者は小泉鉄・小山栄三)、折口の活躍した民俗学系統の雑誌に位置づけるのが通例であった(大藤前掲18、45、115頁、福田「日本の民俗学—野の学問の二〇〇年」2009年、吉川弘文館、97頁)。

26 柳田2002(1935)『全集』29巻、322頁。

27 同じ漢字語を用いながらも、

た。『郷土生活の研究法』以降、民族学との弁別を明確化することによって、日本民俗学を構築していった柳田が、何をどう差異化していったのか、1920年代～30年代前半の、その軌跡を明らかにすることは、従来部分的な解釈はあったものの²⁵、今日でも十分意義あるものだと考える。民俗学の人類学や歴史学との関係性を考える上でも、その検証は不可欠である。

1. Ethnologyに「民俗学」を宛てたこと

1935年9月、柳田は雑誌『民間伝承』第1号の「紹介と批評」において自書『郷土生活の研究法』を、次のように言及している。

昭和六年春の全国社会事業指導者大会での講演を序文とし、同年八月の神宮皇学館講演を前編とし、是を敷衍した各論の叙述を、農学士小林正熊君が筆記したものを後編とした、大体に素人向きの入門書で、主として此方法を補助としなければ、郷土の前代生活の郷人の必ず知りたいと思ふものがわからぬといふ理由が説いてある。論旨は一卷としては統一して居るが、何分四年以前の公表のまゝである為に、材料がまだ具備せず、用語にも今と異なるものがある。民族学を「民俗学」と改め、フオクロー即ち今いふ民俗学を特に「日本民俗学」と呼ぼうといふ当時の提案は、著者自身も今日は採用して居ない。さうするには時期が早いやうである。²⁶(傍点引用者)

本稿が注目するのは、「民族学を『民俗学』と改め、フオクロー即ち今いふ民俗学を特に『日本民俗学』と呼ぼうといふ当時の提案」である。日本語では民俗学と民族学が同音になって紛らわしいという問題は、二つのミンゾク学問題²⁷と呼ばれるが、その解決策として柳田は上記のような案を一時期強く主張した。単純計算すると、少なくとも1931年頃までは、Ethnologyを「民俗学」と呼び、Folkloreを「日本民俗学」とする、一元的な「民俗学」案を公言していたのであり、それは『郷土生活の研究法』の次の二箇所が該当する。

ヴン・ジェネップの書いたものを読んで見ても、彼が民俗学評論といふ雑誌に、国内の民間伝承を併せ説いて居る如く、仏蘭西ではまだ一般に、民俗誌学(エトノグラフィ)及び民俗学(エトノロジイ)と、我々の謂ふところの郷土研究、または英国でいふフオクローアの学問との、差別分解がはつきりして居らぬやうである²⁸

独逸人が発明したこの自他内外の二つの学問は、実際適切なる訳字の選定に難儀する。私はかりにフォルクス Kunde の方を一国民俗誌学、または日本民俗誌学、今一つのフェルケル Kunde を万国民俗誌学、もしくは誤解のおそれがないならば比較民俗誌学と名けて置いて、他日もつと好い語があつたら取替へることにしようと思ふ。さうしてこの知識が十分に整理せられ、一つの体系を以てこれを臨むことが出来、……時節が来たら、始めてわが国でも日本民俗学を名乗つても、未だ必ずしも遅しとせぬであらうと信ずる。……それよりか問題は主として内容実質の如何に存する。……我々は、記録文書の歴史をもたぬ天が下の諸蛮民の過去が、すべてこの郷土研究の方法を以て探尋せられ、自他平等に一つの民俗学の対象となるべき日の到来することを信じ且つ望むのである²⁹(傍点引用者)

いうまでもなく Volkskunde と Völkerkunde とは、ドイツ語の直訳的な表現でいえば、単数民族学(自国民俗学)と複数民族学のことを指すが³⁰、『青年と学問』(1928年)に所収された1926年5月の講演「Ethnology とは何か」という講演では、柳田が Ethnology に対して「民俗学」という語を当てようとしていた事実を、より明確に示す、次のような一節がある。

エスノロジーとは全体どんな学問であるか。之を二三の辞典類に依つて、知ることが既に容易で無い。現に自分などは学校で講釈するのに、今尚訳語の決定に苦しんで居る。民俗学と訳して見たいのであるが、困るのは「民族」といふ語と響が紛らわしいのみならず、別に民族学と謂ふ方がよいといふ者であるので、俄かにさうきめるわけに行かぬ³¹(傍点引用者)

柳田によれば、「国により又学者により、Ethnology くらゐ区々不同の範囲を持つて居る学問は無い」³²として、仏英の用法の相異を論じながら、英国では Anthropology の方が一般的で、E. B. タイラーは終生、Ethnology の語を使用せず³³、また J. G. フレーザーは自分の学問を Social Anthropology を自称していた経緯を紹介する。こういう国々の差異があるゆえに、うっかりと訳語を逐語的に決定できないと注意を促す一方、「我々の学びたいのは名では無く、其内容であ」³⁴って、近年の学問の進展から、この意味において「人類研究の学問の少なくとも半分、即ち Ethnology と呼ばれる方面だけは、行くへ次第に National 国民的になるべきもの」³⁵として、国民的なものを「日本民俗学」と呼ぼうと提案する。すなわち「英国などは古風な且つ高慢な国であるが、もう此節では国内民俗の研究

中国語や韓国語では発音が異なる。また二つのミンゾク学問題は、2004年の日本民族学会の日本文化人類学会への改称で、ひとまず収まりつつあるが、大阪千里の国立民族学博物館などには、その名が使われている。伊藤幹治は「エトノスとしての民族」の文化を研究する民族学と、「ネイションとしての民族」の文化のなかに伝承される「民俗文化」を研究する民俗学という言い方で、両者を区別する(『日本人の人類学的自画像——柳田国男と日本文化再考』筑摩書房、2006年、15頁)。

28 柳田1998(1935)『全集』8巻、232頁。ここでは「初版・初出重視の編集方針」を採用している『全集』に依拠したが、この箇所を「定本」や『文庫版全集』では、「民俗学」を「民族学」に、「民俗誌」を「民族誌」に変更している。また前頁(『全集』8巻、231頁)にあるジェネップの民俗誌評論(ルビウ・デトノグラフィ)も「族」に改訂されている。

29 柳田1998(1935)『全集』8巻、233頁。傍点の「民俗学」の箇所を「定本」や『文庫版全集』では、「世界民俗学」に変更するが、「民俗誌学」に関しては直されていない。また次頁にある「私の謂ふところの万国民俗誌」(『全集』8巻、234頁)も変更はない。

30 石田英一郎や岡正雄らは、前者を「自」「単」民族学、後者を「他」「多」民族学と称している(石田「歴史科学としての民俗学と民族学」『民族学の基本問題』北隆館、1950年、56頁、岡「民俗学と民族学」『日本民俗学大系』1巻、平凡社、1960年、178頁)。

31 柳田1998(1928)『全集』4巻、148頁。

32 柳田1998(1928)『全集』4巻、148頁。

33 柳田1998(1928)『全集』4巻、150頁。ただし、タイラーは

Rational Ethnography 合理的民俗誌学という語は使っており、フランス人と同じく「自分の学問の基礎がエスノグラフィーであることを認めて居た」とする(『全集』8巻、152頁)。

34 柳田1998(1928)『全集』4巻、150頁。

35 柳田1998(1928)『全集』4巻、160頁。

36 柳田1998(1928)『全集』4巻、161-162頁。

37 柳田1998(1928)『全集』4巻、162頁。

38 柳田1998(1928)『全集』4巻、168頁。

39 柳田1998(1928)『全集』4巻、172頁。

40 柳田1997(1922)『全集』3巻、185頁。

を、Ethnologyと謂つても人が怪しまぬ迄になつた。さうして従来は特にFolk-Loreと名づけて、全然別途の学問の如く考へて居たものが、次第に合体して広義の人類学の大切な一部分を為すやうになつた³⁶として、「フオクロアの新生面」として、それを次のように続ける。

フオクロアは其文字の示す如く、最初は単に珍しい民俗の蒐集と排列に過ぎなかつた。しかも比較の進むにつれて、それが暗々裡に重要な前代事績、殊に基督教化前の記録乏しい過去を解説することを実験して、人は之に対して肅然として容を改めたのである。乃ち文書に恵まれざる引い民衆の為には在来歴史と名づけて居た方法を断念して、曾て蛮夷の国にのみ適用して居たものを、試みに此方面にも当てはめて見ようといふことになつたのである。さうすると言語と感情の共通といふことが、始めて非常に大きな要件であることがわかつて来た。日本人の自ら此点に心付くと否とに拘らず、此学問の本当の世界協力が、各国民をして自ら調査せしむるに在ることを、彼等が言ひ出すのも近いうちのことだらうと我々は信ずる³⁷(傍点引用者)

彼等とは英国などの欧米であり、蕃夷の国に適用していたものとはEthnologyのことであるが、ここでも「フオクロアとエスノロジーとの婚約」³⁸によって、両学問が近年大いに発展したこと、および珍奇な民俗の蒐集と排列であったフオクロアが、文書に恵まれぬ民衆の歴史の解明に応用できる可能性を説いている。『青年の学問』に所収の1926年4月の「日本の民俗学」という講演でも、「民俗誌家(エトノグラフ)は同時に民俗学徒(エトノログ)で無くてはならぬ」³⁹とするように、この頃のある時期までの柳田の文章では、「民俗学」とあるのを、今日のように逐語的にFolklore、Folkloristicsだと捉えてはならない。ほとんどEthnologyの意味であつて、日本民俗学と日本が付されてある場合だけが、今日の民俗学を指示する。

先述した柳田の自書紹介で述べた「当時の提案」とは、こうした内容だったが、それはいつからいつまでなのか、時期を確定してゆきたい。最初におおよその時期を掲げておけば、このような用法が見られるのは、国際連盟委任統治委員会の委員として渡欧した以降の講演をまとめた『青年と学問』からである。渡欧以前の『郷土研究』時代の論考を中心に、1922年にまとめて上梓された『郷土誌論』には、「農に関する土俗」(1918年)も収録され、「農業と云ふ中でも、稲作に就いては特に記念すべき伝承が多い」⁴⁰といった記述もあるが、ここに民俗学やフオクロアの方法に関する議論は見られない。「民俗学」やフオクロアという単語も見られず、郷土誌に関する範囲に視野は

限られている。

一方、『青年と学問』は10の講演原稿を集めたもので、1931年に『郷土研究十講』という名で再版されたが、渡欧中に吸収した人類学や民俗学の知識が存分に鑲められている。配列された「青年と学問」(1925年)「旅行の進歩及び退歩」(1927年)「旅行と歴史」(1924年)「島の話」(1926年)「南島研究の現状」(1925年)という最初の5つの講演で、焦点を当てているのは、「民族」や「植民政策」「島」「移住」といった問題である。具体的にいうと、例えば「太平洋研究の学問」⁴¹や「日本の分担すべき学問」⁴²には新展開があったとして、「風俗習慣、時としては迷信などとも呼ばれて、今以て暗々裡に平民の行動を支配して居る信仰のきれへなもの、人によつては是だけを引き離して土俗学と名け」⁴³と述べたり、「米国がフィリピンを取つてからまだ三十年にはならぬが、あの後の土俗調査事業には目ざましい成績がある」⁴⁴とか、「西洋でも土俗誌の起原は所謂旅語りであつた」⁴⁵とするように、議論は専らエスノロジーや地方語の問題を軸に展開される。

わずかに数箇所、フォクロアという単語でないものの、それに類する論及がある。例えば「旅行と歴史」の「文字以外の史料としては……活きた人間の活き方である。即ちその人の使ふ言葉、折々現れるその人の考と心持である。今まで只一つへの珍しい風習、かはつた歌や物語、謎や諺、その他一括して口碑と名付けて居る色々の昔話なども、物ずきの人の切れへの注意を引いては居たが……幸ひにして此学风の段々盛んになつた御蔭に、日本人の多数の過去の心が、少しづつ明らかならうとして居る」⁴⁶という記述と、「南島研究の現状」の「文化普及の法則」として「静かなる池の汀に、繰返して小石を投込んだ場合のやうに、段々の波紋の輪が、首里那覇の間を中心として逐次に四方に進んで行つた跡を認める」⁴⁷という箇所などである。フォクロアあるいは郷土研究に関する言及であり、「日本人の多数の過去」の心のみならず、その跡(プロセス=周圏論)が浮かび上がってくるとして、歴史への応用が説かれはじめている。

これに対して「地方学の新方法」(1927年)以下の「農民文芸と其遺物」(1927年)「郷土研究といふこと」(1925年)「Ethnologyとは何か」(1926年)「日本の民俗学」(1926年)という5つの講演は、エスノロジーとフォクロアとの関係性が主題化される。ただし、最後の「日本の民俗学」にしても、前述してきたように「民俗学」はエスノロジーのことであって、注意を要する。「地方学の新方法」では、「平民の歴史が新しい方法の立て方によつて……沢山の隠れたる部分がわか」⁴⁸ることを、「口碑と伝説」⁴⁹を例に論じる。「農民文芸と其遺物」では「さうして近世になつて、斯ういふ遺習を専ら研究する学問が、外国の各地にも起つた」⁵⁰として、遊戯や民謡を事例に説明される。

41 柳田1998(1928)『全集』4巻、18頁。

42 柳田1998(1928)『全集』4巻、24頁。

43 柳田1998(1928)『全集』4巻、25頁。この土俗学の前に「民間文芸、即ち記録に由らずして今日に伝はつた歌謡昔話謎諺などの中に、見出さるゝ前代人の物の見方考へ方である。文学史といふものが正しく解せられるならば、必ずその主要なる部分を占むべきもので、現に諸君のよく知つて居られる折口信夫氏などが今全力を挙げて開拓して居る荒野らである。自分も閑居の日が来たら、その中の五歩歩か一段歩だけを、小作でもして見たいと願つて居る」と記している。

44 柳田1998(1928)『全集』4巻、28頁。

45 柳田1998(1928)『全集』4巻、35頁。

46 柳田1998(1928)『全集』4巻、54頁。

47 柳田1998(1928)『全集』4巻、87-88頁。

48 柳田1998(1928)『全集』4巻、107頁。

49 柳田1998(1928)『全集』4巻、109頁。

50 柳田1998(1928)『全集』4巻、124頁。

- 51 柳田1998(1928)『全集』4巻、131-132頁。
- 52 柳田1998(1928)『全集』4巻、161-162頁。
- 53 柳田1998(1928)『全集』4巻、162頁。
- 54 柳田1998(1928)『全集』4巻、163頁。
- 55 柳田1998(1928)『全集』4巻、167-168頁。
- 56 柳田1998(1928)『全集』4巻、171頁。
- 57 柳田1998(1928)『全集』4巻、173頁。
- 58 『定本』別巻5巻、637頁。
- 59 この「講演手控」が『全集』35巻、2015年に収録されている。
- 60 『定本』別巻5巻、632頁。
- 61 高橋治「柳田国男の洋書体験 1900-1930——柳田国男所蔵洋書調査報告」柳田国男研究会編『柳田国男・民俗の記述(柳田国男研究年報3)』岩田書院、2000年、229、250頁。

「郷土研究といふこと」は、のちに再度分析を試みるが、「我邦で最初にフォクロアの学問を唱へた故高木敏雄君」と1913年に雑誌『郷土研究』を創刊したこと、「我々のフォクロアが、訳すと郷土研究となるのだらう位に考へて居る人もあ⁵¹」ったとして、郷土研究の本来的な意義が論じられている。

「Ethnologyとは何か」は、前述したように「フォクロアの新生面」⁵²が紹介されるものの、「フォクロアは今日でもまだ独立した一派の学問とは認められず、言はゞ研究の一つの方法に過ぎぬが、二十世紀のEthnologyは全く其力によつて面目を一新した」⁵³と論じる。「日本の民俗学」でも「最近の稍成長したフォクロアは、例へば英国でいへばリバース博士などのエスノロジーと、目的及び研究方法に於て大様一致する所まで来て居る」⁵⁴とし、「フォクロアの成長」⁵⁵の一節を設けるほか、「時代の最も健全なる学風、即ち比較研究の方法は是にも応用せられ……所謂蛮土人の社会にも進化があつて、今現前するものは同時に又、彼等が歩いて来た前代を説明する。さうして只之に由つてのみ、彼等の将来を推測することが出来る」(傍点引用者)とし、それが先駆的に可能な日本の「学問上の使命」⁵⁶が訴えられている。さらに「こちらから在る場処に臨んで、関係者と共々に考へ且つ感ずることを以て職分とする所の、フォクロリストを必要とする所以」⁵⁷だとして、エスノロジーからフォクロアへと一歩踏み込んだ発言もしている。

2. Ethnology=「民俗学」の終焉

エスノロジーに「民俗学」を宛てた時間的な上限と下限を確定しておこう。活字化されたものでは前述したように1935年の『郷土生活の研究法』にも、その表記が残っているが、以下では柳田の思索を中心に、1920年代から30年代前半の関連事項を、年表化した表1を参照にしつつ、整理を試みる。

まずはその時代的始源は、1926年4月の講演「日本の民俗学」からだといってよい。『定本』年譜では、4月22日に「日本社会学会で『民俗学の現状』を講演」⁵⁸とあるが、その講演⁵⁹手稿である。国際連盟委任統治委員会におけるその職務の関係上、帰国後もエスノロジーや植民政策の専門家としての講演等が増えたが、「フォクロアとエスノロジーとの婚約」を謳いはじめた柳田にとって、二つのミソジク学問題は切実なる難問となってゆく。ちなみにフレーザーの『旧約民習編(Folklore in Old Testament)』を購入したのは1919年5月15日であり⁶⁰、同年8月14日に第1巻を読了し、第2巻は1920年7月8日に読了している⁶¹。

表1 柳田國男の1920年～35年の関連年表

	学会活動	地位や他の活動	関連著作	関連論考	講演・授業	摘要
1920年	東北旅行 九州・沖縄旅行	東京朝日新聞 入社	赤子塚の話	豆手帖から 準備なき外交	慶應義塾大学で 民俗学講義	農政方面の蔵書 を寄贈
1921年	渡欧	国際連盟委任 統治委員就任		俗聖沿革史 海南小記		
1922年	南島談話会		郷土誌論 祭礼と世間			
1923年	帰国	国連委員辞任				
1924年		朝日新聞社論説 担当		木綿以前のこと	慶應大学で民間 伝承論講義	
1925年	北方文明研究会 雑誌『民族』創刊 おもろそうしの会		海南小記	山の人生 地方文化建設序説	青年と学問 郷土生活といふこと 南島生活の現状	
1926年	吉右衛門会 (昔話研究会)		山の人生	清光館哀史 人を神に祀る風習	民俗学の現状 Ethnologyとは何か	
1927年	民俗芸術の会			蝸牛考 民間些事 方言と昔		岡正雄訳・バーン 『民俗学概論』
1928年	方言研究会		雪国の春 青年と学問	小さき者の声 野鳥雑記 木思石語		雑誌『旅と伝説』 創刊
1929年	『民族』休刊		都市と農村	葬制の沿革について 野の言葉 簞入考		方言研究の盛んに 雑誌『民俗学』 創刊⇒民俗学会
1930年		朝日新聞社論説 委員辞任 (以降、社友)	蝸牛考	野草雑記 東北と郷土研究	社会人類学の方 法と分類 民間伝承論大意	今泉忠義訳・ベ ヤリング=グールド 『民俗学の話』
1931年	釜山・慶州・大邱・ 対馬旅行 郷土科学研究会		明治大正史世相篇 郷土科学研究講座 (第1冊)監修	厄介及び居候 郷土生活の将来 世間話の研究	東京文理科大学 で民俗学講義 神宮皇學館の夏期 講習会で「郷土史」	
1932年	東京方言学会		秋風帖	郷土史研究の方法 口承文芸大意	民族の採集と分類 フォクロアの蒐集 と分類 東大農学部での 農業史の中で民 俗学の講義	郷土生活の研究 法の会(小林正 熊が講述) 後藤興善訳・ジュ ネップ『民俗学 入門』
1933年	雑誌『島』創刊		桃太郎の誕生	民俗学の話 漁村語彙 児童語彙		民間伝承論講義 (後藤興善が講 述)⇒木曜会
1934年			民間伝承論		日本民俗学の提唱	日本民族学会
1935年	雑誌『民間伝承』 創刊 日本民俗学講習会 ⇒民間伝承の会 山村調査		一つ目小僧その他 郷土生活の研究法 産育習俗語彙 (共編) 日本民俗学研究(編)	国史と民俗学 紹介と批評で自評 小児生存権の歴史 史学と世相解説	今日の民俗学	

62 柳田1997(1925)『全集』3巻、240-241頁。

63 赤坂憲雄「解題・海南小記」1997『全集』3巻、813頁。

64 柳田1997(1922)『全集』3巻、192頁。

65 ただし、『祭礼と世間』の本文上欄に付された小見出しにおいては、二箇所、本文にはない「民俗の起原」(『全集』3巻、201頁)「民俗と伝説」(同、203頁)という表現が認められる。

66 柳田1998(1931)『全集』5巻、337頁。

67 1930年4月の東京人類学会での講演「社会人類学の方法」では、自らの学問をフレイザーに倣って社会人類学の名を使ったほか、資料分類として「生活様式を研究するもの」「生活解説を試みるもの」「生活観念に突入すること」という、後に言われる三部分類案を初めて提示した(大藤前掲18、34頁)。

68 柳田2001(1932)『全集』28巻、543頁。

69 ただし『全集』解題では、『郷土風景』の創刊号の「編輯後記」に「殊に次号に執筆して下さるべく、今から予約済みの人で、先づ柳田国男氏、早川孝太郎氏、小寺融吉氏、折口信夫諸氏の民族学の権威」とあることから、民族学は民俗学の間違いで、編輯者の思い込みの可能性が高いと論じている(解題執筆者は小田富英、『全集』28巻、2001年、657頁)。筆者は沖繩・アイヌの形体文化(有形文化)の事例から、筆を起している点から、エスノロジーを想定して執筆されたものだと判断した。

この講演からだろうと判断するのは、前年の1925年に大岡山書店から刊行された『海南小記』の4月8日付の「序」に、アイヌと沖繩研究の先達者B. H. チェンバレンを紹介し、「我々が今頃少しづつ、必要を唱へて居る土俗誌の研究に、彼は遠国から来て三十年前に手を着けた」とし、「新しい民族学の南無菩薩の為に、謹んで此書を以て日本の久しい友、ベシル・ホール・チェンバレン先生の、生御魂に供養し奉る」⁶²と記したことによる。後ろの引用文の「新しい民族学」は、1931年8月19日に上梓された改造社版では「新しい民俗学」と改められ、以後の改版本では「民俗学」が踏襲されているという⁶³。改造社版の「民俗学」への書き換えは、エスノロジーの意味だと解釈するが、それ以降の踏襲の理由は沖繩研究をフォクロアの範囲と見做したためだろうか、単なる「踏襲」の可能性もある。

それ以前の、例えば1922年11月5日付の『祭礼と世間』の「小序」では、「Folk-Loreの学問も、御蔭を以て其頃からめきへとして都鄙の間に盛になり」とするように⁶⁴、この頃の柳田はFolk-Loreやフォクロア、民間伝承(論)や、あるいは郷土研究を用いることに徹しており、今の民俗学に対して、その名を宛てることに強い忌避感を示している⁶⁵。1924年からの慶應義塾大学の講義が民間伝承論であるのに対し、1920年の同大学の講義名が民俗学であるのは、二つのミンゾク学問題に揺れる以前の状態、すなわち単純にフォクロアを指したものかと思われるが、その前後には「フォクロアの範囲」といった表題の講演が多い。

これに対し1931年5月からの東京文理科大学における「民俗学講義」はエスノロジーの可能性が高い。時代的な下限に議論を移そう。1931年に上梓された『明治大正史世相篇』の有名な自序では、「自分は現代生活の横断面、即ち毎日我々の眼前に出ては消える事実のみに拠つて、立派に歴史は書けるものだ」とし、「此方法は今僅に民間に起りかけて居て、人は之を英国風にFolkloreなどと呼んで居る。一部には之を民俗学と唱へる者もあるが、果して学であるか否かは実はまだ採決されて居ない」⁶⁶と論じるが、以下で述べる『郷土生活の研究法』の編纂過程と、それは深く関連している。なぜ修正されないうまま、1935年に出版され、自評で言及したのか、その複雑な成立経緯を詳しく追ってみる必要が出てくる。

それを議論する前に、エスノロジーを「民俗学」ではなく、民族学と呼び始める時期から確定しよう。管見の限り、1932年9月1日の講演「民族の採集と分類」では、いわゆる資料の三部分類⁶⁷を沖繩とアイヌとの事例から説いており、そこには「正しい民族学の使命」⁶⁸という文言が出ている。エスノロジーを「民俗学」と訳する提言を放棄した端緒である⁶⁹。『民間伝承論』では「エスノグラフィーから生れ出たエスノロジー」を「民族学と訳すことは、フォクロア

を民俗学と訳す場合、同音なるが故に紛はしくて悩まされることが多く、「土俗学」あるいは「殊俗学」⁷⁰と訳すことが提言される。つまり、二つのミンゾク学問題に対して、エスノロジーの方を変更するか、あるいはフォクロアに民間伝承論を採用するという、新たなスタンスで臨むようになっている。

『民間伝承論』の第1章冒頭で『民俗学』といふ語を普通名詞として使用することは日本ではまだ少しばかり早いやうな感じがある」と述べ、「民俗学といふのは惜しい言葉であるが、我々は之を避けねばならない」⁷¹と論じている。章節の表題には「一国民俗学」や「世界民俗学」といった言葉が躍るように、実質、それはフォクロアに民俗学を宛てたことと変わらないが、民俗学を名乗りたくない一番の理由は、「此学問の或部分などは却つて飛んでもない処まで進出して居らしい懸念さへ多い」からである⁷²。しかしながら、現実的にはエスノロジーの方を変更する案は、1934年に日本民族学会が設立されるに至って不可能になり、また1935年に民間伝承の会が創設されたことで、民間伝承(論)の名も定着していった。

以上を前提に、『郷土生活の研究法』の編纂プロセスを再検討すれば、巻頭論文の「郷土研究とは何か」のみが柳田の直筆で、それ以外は速記録および小林正熊による口述筆記であったことは、後藤興善による『民間伝承論』と何ら変わらない。1931年に神宮皇學館の夏期講習会でなされた「郷土史」のパンフレットを基に、翌1932年4月25日から、それを検討する「郷土生活の研究法」の会が定期的に開かれるが、有賀喜左衛門・池上隆祐・熊谷辰次郎・小林正熊・野口孝徳・後藤興善・大藤時彦が参加し、意見を求められた。「郷土生活と文書史料」から「新たな国学」までは神宮皇學館でなされた講義の速記録に、柳田自身が手を入れた小冊子(抜刷)「郷土史研究の方法」(『夏期講習会講演集』神宮皇學館、1932年3月5日)があり、一〜二五と漢数字で分節された構成を、小林によって章・節・小見出し等へと変更された。後編の「民俗資料の分類」は「郷土史研究の方法」の付録であった「民俗資料分類表」に代わるものとして、小林が1932年11月26日から翌1933年3月1日までの計6回の柳田の講述を筆記したもので、これに加えて4月6日から12日までの6回に亘る疑問点の補足質問を小林が行って完成したものだった⁷³。

有賀をはじめ「郷土生活の研究法」の会に示されたパンフレットとは、この1932年3月5日付小冊子であったと思われるが、大藤によれば「誤植や誤りが多かったので先生はこれを改訂して出版しようとかねて考えられ」⁷⁴とあるように、Ethnology = 「民俗学」という説を放棄していたのであれば、この時点での修正も可能だったと考えるのが至当だろう。1932年4月からの「郷土生活の研究法」の会での修正も、小林とのやり取りの中での修正も十分可能であった。

70 柳田1998(1934)『全集』8巻、38頁。「殊俗学」という名辞が古代の『類聚国史』からの部立に従っていることについては、拙稿「民俗・風俗・殊俗——都市文明史としての『一国民俗学』」宮田登編『民俗の思想』朝倉書店、1998年で論じた。

71 柳田1998(1934)『全集』8巻、16頁。

72 「飛んでもない処」への進出とは、「民俗学」をエロティックな著作の名に使う輩が1920年代半ばに続出したことを、意味するだろうと、拙稿「柳田國男の性と愛—その恋愛忌避説をめぐって」『歴博』98号、国立歴史民俗博物館、2000年で論じた。

73 大藤時彦「『民間伝承』のころ」牧田茂編『評伝柳田國男』日本書籍、1979年、185-186頁。後藤総一郎「解題・郷土生活の研究法」『全集』8巻、1998年、657-666頁、小田富英「解題・民俗資料分類表」『全集』28巻、2001年、652頁。

74 大藤前掲19、247頁。

75 ここでの民俗学は、小林の後編「民俗資料」のうちの「交易」「交通」「労働」の内容を含んでいたという記述からして(小林正熊「編者のあとがき」『郷土生活の研究法』刀江書院、1935年、329頁)、フォクローアを指すものと判断した。

76 『定本』年譜などを見ると1933年になると、柳田は一時期、フォクローアを「民俗学」に戻した期間があった。2月4日の國學院大學方言学会での講演「何のために方言を集めるか——民俗学と言語学との関係」(『全集』29巻、32頁)や、5月11日の高田館での座談「民俗学の話」(同、77頁)のように、フォクローアを「民俗学」で呼ぶことに忌避感を示していない。次節で述べるフォクローアという原語の便宜性を重視した時期と重なるか、その直前の時期にこれを区分することも可能であるが、一方、同時期には民間伝承論の名も提案されており、1933年から翌年にかけては柳田の用語法は極めて揺れていたといえる。その下限区分は、「日本民俗学」を宣言する後述の1934年講演「日本民俗学の提唱」以前となる。

77 伊藤幹治「解題・国史と民俗学」『全集』14巻、1998年、617-619頁。

ただし、『定本』年譜にある1932年12月2日「東京帝国大学農学部で農業史の時間に民俗学の講義を始める。以降、(昭和)十年二月二十一日まで続く」(括弧内および傍点は引用者)という事項が、小林が「編者のあとがき」で述べる「ちやうど私たちがお話を伺つてみた時と前後して、先生が駒場で話された農民史の中に、この問題が含まれてみた」という聴講の事実と符合するならば⁷⁵(加えて「民俗学の講義」という表記が正しければ⁷⁶)、下限は1932年12月以前となるだろう。

さらに、前述した1932年9月1日の「民族の採集と分類」が、誤植ではなく、「民族学」を使ったことが正しいとするならば、下限はそこまで遡る可能性がある。いずれにせよ、1933年9月14日からは後藤興善・比嘉春潮・大藤時彦・杉浦健一・大間知篤三らが参会して、新たなスタンスの下、「民間伝承論」の講義も始まるが、『民間伝承論』にはその痕跡は一切残されていない。ちなみに、このような経過から編纂開始は『郷土生活の研究法』の方が『民間伝承論』より早かった。刊行が逆転していることに注意しておく。

3. 過渡期としてのフォクローア

『定本』には1931年に執筆された「郷土研究の将来」という論考が2箇所収録されている。第25巻は1931年の初出論文のままが、第24巻には1944年上梓の『国史と民俗学』に採録され、字句の修正された「郷土研究の将来」が掲載されている。『全集』の解題⁷⁷でも、この事実は言及されるが、簡明すぎて論点が逆にわかりにくいので、1931年の初出を文脈に合わせて紹介することで、前節で論じた二つのミンゾク学問題の過渡期的な状況を、より鮮明に描出したい。

比較するのは、柳田國男・中山久四郎・辻村太郎監修・郷土科学研究会編『郷土科学講座』第1冊(四海書房、1931年9月)に所収された「郷土研究の将来」(『定本』25巻)と、『国史と民俗学』(六人社、1944年)所収の「郷土研究の将来」(『定本』24巻)である。前者を①、後者を②と符号化する。まずは日本では特にフォクローアとエスノロジーが未分離で進んだことを述べた①の次の箇所である。

民俗学の起りは、必ずしもさう新しいことでは無かつたが……始めて我邦への未完成のまゝの新学を持つて来たのは、日本の人類学の創設者たち、殊に故坪井先生の忘るべからざる功績であつた。……まだ其頃までは我々自身の存在は、批判せらるるか無視せらるるか以外は、単に記述せられたといふものが至つて少なかつた。異民族に就いても長崎見聞の雑書を除けば、僅か

に寺島氏の和漢三才図会が、諸越の古い記録を丸写しにしたのを見る位のものであつた。是が始めて世界地図の各部分と照して、そこに今住んで居る蛮民の姿と特徴の若干とを、知るといふのだから新らしかつたに違ひないが、実際は我々の歴史などは、至つて縁の遠い学問であり、従うて又いゝ加減粗末に取扱はれても居た⁷⁸(傍点引用者)

78 柳田1964(1931)『定本』25巻、471頁。

79 柳田1963(1944)『定本』24巻、56頁。

80 柳田1964(1931)『定本』25巻、472頁。

81 柳田1963(1944)『定本』24巻、55頁。

82 柳田1964(1931)『定本』25巻、472頁。

83 柳田1963(1944)『定本』24巻、56頁。

84 柳田1964(1931)『定本』25巻、473頁。

冒頭の「民俗学」は、①では「いはゆる民族学」⁷⁹に字句修正されるが、坪井正五郎らによって「我々自身」を記述したものは少ないものの、「異民族」に対する「民俗学」とともに共存したこと、それが歴史とは縁遠い記述であったことが論述されている。すなわち「民俗学」にはフォクロアとエスノロジーの両方が含み込まれたのであり、この引用の二行前にある、「兎に角に考古学人類学は先づ栄え、民俗学は後れて尚とぼへと歩いて居る」⁸⁰は、①においても「民俗学」⁸¹であることは、両者の峻別が厳しくなかったことの証左といえる。このように、両者が混用されてきた事情に日本の特殊性のあることは、次の記述からも窺える。

今でも土俗誌学などゝ之を訳して、済ませて居る人があるのは其痕跡である。土俗といふ言葉は久しい前からの漢語であつて、字面から言ふならば或郷土の習俗、土に即して古来存するものといふだけかも知らぬが、此語を用ゐる人々の心持には、卑しく鄙びた又奇つ怪なる所作、自分たちならばさうはせぬといふ意味があつたやうだ。是がちやうど又Ethnographyといふ洋語の、当初その本地に於て帯びて居た語感でもあつた。少なくとも人が此学問に期待して居た所は、聴き馴れぬ珍しい話によつて、一種微笑を伴ふ驚駭の如きものを、味はうとした……到底まだ我々の郷土研究を、躍進せしむるには足らなかつた⁸²(傍点引用者)

②では「土俗誌学」を「土俗学」に、「Ethnography」を「Ethnographie」⁸³に改められている。続けて「曲亭馬琴が書かうとした朝比奈巡島記一味の読本は、あれより少し前頃には西洋にも流行して居た」とし、「必要とあらば少しは法螺もまじへ、誇張はもとより」であつた記述が、今日の整理せられたるエスノグラフィーによって、「大体に意外なる奇事珍聞が消え、不可測なる現象と見られたものから、もとの彩色が段々と褪めて行つた」⁸⁴と説くが、奇事珍聞が消えたという点を指摘していることは、のちの議論まで留意されたい。

我々はいつも翻訳の為に悩まされて居る。……フオクローアとい

85 柳田1964(1931)『定本』25卷、476頁。

86 柳田1963(1944)『定本』24卷、60頁。

87 柳田1963(1944)『定本』24卷、61頁。

88 柳田1964(1931)『定本』25卷、478頁。

89 柳田1963(1944)『定本』24卷、62頁。

90 柳田1964(1931)『定本』25卷、478頁。

91 柳田1963(1944)『定本』24卷、62頁。『定本』では「郷土研究の将来」に「目次」が付いている(『定本』25巻、464頁)。節に相当する箇所、見出しになろうが、その中に「民俗学」が発現する。第4章の最初は「民俗学の起り」であるが、第6・7章はフォクロアに関する事項なので、すべてを紹介しておこう。第6章が「用語の翻訳の不便」「フォクロア概念の成長」「学会創立当時」「上流に関する民間」「伝承は身分境遇によらざる事」「近代社会諸科学の啓発」「三つの発見の照合」「日本の国情はフォクロアと民俗学とを提携せしむ」、第7章が「欧米人の苦心」「白人の採集は遅すぎた」「日本今後の郷土研究」「採集に就いての注意」「西洋模倣の愚」「参考とすべき長処短処」「伝承者を誤らしめざること」「民俗学とフォクロアとは金礦と砂金との関係」である。いうまでもなく、ここでの「民俗学」はエスノロジーのことである。

92 柳田1964(1931)『定本』25巻、480頁。

93 柳田1963(1944)『定本』24巻、64頁。

94 柳田1964(1931)『定本』25巻、480頁。

ふ語なども、当初英国の二三子に由つて採用せられた時の意味と、現在の心持とは余程変つて居るのみならず、其中間にも亦何度かの推移があつた故に、下手に通弁すればどれかを取落す懸念があるので、どこの国でも今に原の語を使つて居る。私は是がエスノロジーの民俗学と合体して、一つの学問となる時まで、それも格別遠い未来でも無いから、先づ此儘にして置く方が便利だらうと思つて居るが、人によつては之を俚伝学と謂つたり、又は實質に基づいて民間伝承学とも言つたりする。実際はまだ独立した一派の学では無いのである。始めて此名の学会が英国に起り、次いで欧大陸の各邦に普及した頃には、是も民俗誌と全く同じに、単なる記述を以て共同の目的として居た⁸⁵(傍点引用者)

これが⑥では「民俗学」を「土俗学」⁸⁶に、「民俗誌」を「土俗誌」⁸⁷に変更するが、ここでは原語のままフォクロアを使うのが便利だと説いている。これに加えて①の「日本はその特殊なる国情を以て、今まで無意識ながらもこのフォクロアと民俗誌との提携に、よほど重要な媒介の役を勤めて居る」⁸⁸は、坪井以来の学風だとした点は銘記されるが、⑥ではこの「民俗誌」も「土俗誌」⁸⁹に改めている。これに対し、①の「斯邦のフォクロアだけは、いと容易に民俗学の実力を具へ得て、之に立脚して歴史の埋もれて居る人々の為に、彼等の語らんとする所を語らしめることが出来さうなのである」⁹⁰は、⑥では「民俗学」を「民族学」に変更されるが⁹¹、埋もれた歴史への貢献が記された点に留意されたい。歴史学とは縁遠かつたフォクロアが、エスノロジーからの刺激で、史料の空隙を埋める可能性が出てきたことが強調される。

なお、①の「民俗学とフォクロアと、この二つの学問は日本でならば簡単に提携し得るが、それも双方の長処と弱点が、今までの経験によつて大よそ明白になつてからの後のこと」⁹²は、⑥では「民俗学」が「土俗学」⁹³に変更され、①の「民俗学とフォクロアの二つの学問の対立は、金礦と砂金との関係によく似て居る」⁹⁴は、⑥では「民俗学」が「民族学」⁹⁵となっている。①の「民俗学」が必ずしも⑥で「土俗学」や「民族学」になるとは限らず、①の「歴史が是だけ進んだ民俗学の成績を、まだ何としても利用し得ないで居る」⁹⁶は、⑥では「比較民族学」⁹⁷に変更されている。このほか、①の「独逸などは理論のやかましい国だから、夙くから一方を比較民俗誌学 Voelkerkunde、他の一方の一国民俗誌学 Volkskunde と命名して、出来るだけ双方を近づけ又行き通はせようとして居る」⁹⁸を、⑥では「比較民族誌学」と「一国民俗誌学」⁹⁹に言い換えている。文脈に合わせて使い分けられるが、結局のところ、①のように一元化しないと語彙が複雑化す

ることに、柳田がいかに神経を費やしたのかが、垣間見えてくる。

これに加えて、エスノロジーや歴史学との関係性を、柳田がどう把握していたか、その推移を窺わせるものとして、1930年6月に刊行された日本放送協会東北支部編『東北の土俗』（三元社）に所収の「東北と郷土研究」も見ておこう。そこでもエスノロジーの意で「民俗学」が使用されるが、「主として自国の生活、同胞の文化を観察し解説するこの自国民俗学、英語でナショナルエスノロジーとでも名づくるべきものゝ、特に大切なることが分つて来る」¹⁰⁰と論じている。ナショナルエスノロジーという称呼が着目されるが、歴史書では「あまりに平凡な有ふれたことであつたが為に、誰も書残さうといふ氣になら」¹⁰¹かつたと示唆された点¹⁰¹にも注意を喚起したい。「独逸では既に諸国民俗学と、この自国民俗学とを区別して居」るが、「其他の国では其差別を立てゝ居」なかつた中、「此我々の企てて居る部分を、英国人などはフォクロアと謂」つて、直訳すれば「庶民生活誌」とでもなるとし、「最初には対岸大陸の国々では、嫌がつて此英語を真似」なかつたものが、「重宝」な語なるがゆえに、「今ではフォクロアは世界語のやうにな」つたと論じる¹⁰²。

そして「此語が出来て後」、世界的に「レジオナリズム」¹⁰³の機運」が到来することによって、「個々の国民の史観を改造して行つたのみならず、殆ど人類全体の文化総史を究める為にも、……爰にフォクロアは民俗学の唯一の研究手法とならうとして居る」とし、「同時に又日本民俗学といふ様な、今迄聴きつけない名目さへ可能になつたのは、確かに二十世紀の一大飛躍であ」つたと帰結するのだ¹⁰⁴（傍点引用者）。今日みればフォクロアが唯一の研究手法だと大言壮語するのは、どう鼻眉目に見ても勇み足であるが、その高峻なる理想形が、結局のところ『民間伝承論』にも、ひいては民俗学研究所の解散にも連なっていたように思われる。

4. フォクロアと郷土研究、その異同と交錯

このように原語のままのフォクロアを、その便宜性から用いたことを前提に、『青年と学問』で論じ残しておいた1925年10月の講演「郷土研究といふこと」¹⁰⁵における、次の一文を解釈していこう。フォクロアと郷土研究の関係性の位相と、それ以降における転用・拡張を明らかにするための、重要な一節である。

我々はこのフォクロアの如く、資料採集の分野を出来るだけ小さく区劃し、個々の地方を単位とした考察方法、及びその沢山の比較を以て、或事実ある法則を明らかにして行かうとする学

95 柳田1963(1944)『定本』24巻、64頁。

96 柳田1964(1931)『定本』25巻、480頁。

97 柳田1963(1944)『定本』24巻、64頁。

98 柳田1964(1931)『定本』25巻、478-479頁。

99 柳田1963(1944)『定本』24巻、63頁。

100 柳田2001(1930)『全集』28巻、312頁。

101 柳田2001(1930)『全集』28巻、304頁。

102 柳田2001(1930)『全集』28巻、312頁。

103 柳田は「直訳すれば地方主義」であるが、「歴史即ち『古い事』を地方々々で研究して見ようといふ運動」だとする（『全集』28巻、302頁）。また言葉の起りはフランスであるが、ドイツのカルトグラフィーも、西洋の大陸のように長頭も円頭もいくつもの「人種が入り混じつた移動の激しかつた地では、……人種なり地方ごとの変化のあるのに興味を持つ」のに対し、「日本の興味は遠方の一致でなければならぬのに外国の影響によつてカルトグラフィックなちがつたものゝ発見のみ力が入れられ」てしまったと省み、「同じレジオナリズムでも日本はちがふ。幸い日本の民俗学は一致してるものゝ様に向つて」¹⁰⁴いと論じる（『全集』35巻、24頁）。

104 柳田2001(1930)『全集』28巻、312-313頁。

105 『定本』年譜によれば、この講演は「郷土研究の目的」が原題だった。

106 柳田1998(1928)『全集』4巻、132-133頁。

107 これと近似した言説は、講演「青年と学問」における「日本の今の人類学で遺つて居るやうな、骨格其他生理諸相の比較研究、それから外部に現はれた生活技術器具材料、挙動言語の容易に観測し記述し得るもの以外、更にその今一つ底に潜む民衆心理の動きと影響、例へば宗教の最初の刺戟となつた夢やマボロシの色々な変化といふやうな、至つて取り留めの無い種族現象までが、調べて行く方法があり、調べて見れば追々に何物か至つて大切な社会法則を説明するといふ見込みが立つた」(『全集』8巻、24頁、傍点筆者)というものもある。

108 例へば『民間伝承論』では「綿密な計画ある観察は実験と同価値だといえるはず」(『全集』8巻、68頁)としたり、『郷土生活の研究法』でも「出来るだけ多量の精確なる事実から、帰納によつて当然の結論を得、且つこれを認むることそれが即ち科学」(『全集』8巻、259頁)だといったり、そうした記述に溢れている。

109 ただし、柳田は1937年の「童神論」で、当時のドイツ民俗学を紹介し、「ドイツチュウム、すなわちかれの『御国ぶり』を明らかにすることが、今は最も大きな旗じるしとなつていようだが、果たして現代の精密なる科学の、名づけて目的とするものに当るか否かはあやぶまれる」と述べるように、自身のいう民族固有も不変のものとは把握していないようだ(『全集』33巻、382頁)。注106の引用からもわかるように、柳田の場合、その固有信仰も、万古不変のものでなく、変化の社会法則にあるものと解釈した方がよい。

110 柳田1998(1928)『全集』4巻、145頁。

問も、亦この郷土研究といふ汎い総称の中に包含させ得ると信じた故に、又私たちの学問、即ち民族固有の思想と信仰と感情、此等のものから生れて来る国の歴史の特殊性の研究ばかりで無く、尚他の方面の色々な学問にも、同じ態度と方法とを応用し得ると思つた故に、更に又我々は便宜上、さういふ学問の人たちとも手を繋いで進んで行けると考へて居た故に、郷土研究といふが如き広い新しい名称を、自分たちの雑誌の名に付けることを、必ずしも不当なりとは考へて居なかつただけである¹⁰⁶(傍点引用者)

すなわち、「郷土研究といふ総称」=フォクロア+「私たちの学問」+他の関連諸学問であり、かつ「私たちの学問」とは「民族固有の思想と信仰と感情、此等のものから生れて来る国の歴史の特殊性の研究」だとする。フォクロアが「私たちの学問」と等号では結ばれておらず、もし後者の前半に名辞を与えるならば、民族固有という言葉からして、「歴史民族論」あるいは「民族的原因論」とでも呼べるような内容になっている¹⁰⁷。『民間伝承論』や『郷土生活の研究法』で説かれる民間伝承論や郷土研究の方法とは、どこまでも観察と実験に基づく直接的な資料の¹⁰⁸、厳密なる帰納によつて導かれるとする自然科学を範にとつたものだったはずである¹⁰⁹。「歴史民族論」的な「私たちの学問」は、それらの方法とは乖離しているのであって、狭義のフォクロア的な方法論では究明し切れなような、例へば『山の人生』(1926年)や『山宮考』(1947年)『海上の道』(1961年)などの、民族固有の固有信仰などを追究した作品群は、それを想起せしめている。さらに「私たちの学問」は、次のような言い方でも指示される。

之を要するに従来のフォクロアの領域は、行きがかり上今尚不必要に狭隘であつた。所謂郷土研究の中のほんの一小部分を要求するのみであつた。その自然の成長は行く／＼社会心理の側から、若くは経済組織の改造、公共倫理観の再建設、其他色々な実地の事業を準備する為に、研究を進めて行く人たちと、合同はせぬ迄も提携し得る場合は多いだらうと思ふ¹¹⁰(傍点引用者)

この段階の柳田の認識からすれば、フォクロアの領域は狭隘ながらも、ただし、成長するならば、社会心理の側から、もしくは経済組織の改造や、公共倫理観の再建設、そのほかの現実の諸問題にも接続できるという見通しを提示している。石田の指摘した「日本人の生き方や進む路という、より切実な問題」にほぼ等しいものといえる。公共倫理観の再建設に関しては、室井康成が詳論したように、普通選挙法が実施されても依然、旧来の親分子分関係が持続してい

ることの弊を柳田は問うた。選挙粛清運動が吹き荒れる中で、常民自らに内に根付いた事大主義を気づかせることで、良い選挙民すなわち公民を養成することを¹¹¹、実践的な現実課題の一つとした。『明治大正史世相篇』の「我々の考へて見た幾つかの世相は、人を不幸にする原因の社会に在ることを教へた。乃ち我々は公民として病み且つ貧しいのであつた」¹¹²という結語が示すように、このような社会問題の解明に資するための学問が、柳田のいう「私たちの学問」なのだといえる。先の柳田の説明の「此等のものから生れて来る国の歴史の特殊性の研究」という後半箇所が相当する。これを「史的特殊性」と呼んでおく。

いうまでもなく、これらは1925年段階での「郷土研究」の積義である。1913年の『郷土研究』創刊時の柳田の思索とは当然異なっていようが、本稿ではそれは問わない。本稿で扱うのは、1925年以降のフォクロアと郷土研究、あるいは「私たちの学問」との位相や、それらの関係性の推移を探ることであり、基本的に表2で示した期間の変化に焦点を当てたい。自身で『民間伝承論』を失敗と評価した1947年の論考や、民俗学研究所解散を惹起した石田の講演、また石田の柳田評なども言が及ぶが、あくまで1925年から1930年代の柳田の思惟の変化を見るための参照にすぎない。

「郷土研究といふこと」では「我々は誤解を避ける為に、なるべく歴史といふ字を用みまいとして居る」として、「国民生活誌」¹¹³と名付けている。「東北と郷土研究」で使った「庶民生活誌」とほぼ同義だろうが、「生活誌の限地的討査」は「今や次第に全国に普及し、且つ段々と著実になつて来た」¹¹⁴と振り返り、郷土研究のさらなる必要なる理由を、それぞれの郷土の特殊性を捉えるとともに、遠方における郷土の同質性を見極めるためなのだといひてゆく。「農村生活の地方毎に単一で無」¹¹⁵、「各地方の個々独立した研究」¹¹⁶が必要であり、「隅から隅まで知り抜いた我部落」から始めるのがよい¹¹⁷とする一方で、「之を解釈する手段をとっては、出来る限り多くの地方と連絡を保ち、互ひに相助けて比較をして見る事。必要があれば其比較を国の外、世界の果までも及ぼすこと」¹¹⁸と、比較と総合¹¹⁹の必要性が強調される。「地方史料の種類」として、方言や地名を事例にしなから、「文書の価値は勿論軽んじないが、その材料の不足な場合が多いことを知つて、常に力を自身直接の観察に置くこと」¹²⁰にも、注意を向けさせている。

日本におけるフォクロアの展望を、柳田はこのように豪壮に語る一方で、気になる発言も行っている。「現に二三の外国に於いては、資料の減少からもうフォクロアは行き詰まらうとして居る。日本も末にはさうであらうが、まだ消え行くものが消え残り、恰も過渡期なるが故に特に我々は忙しい」¹²¹のだと述べている。日本が文明国

111 室井康成『柳田国男の民俗学構想』森話社、2010年。

112 柳田1998(1931)『全集』5巻、609頁。

113 柳田1998(1928)『全集』4巻、137頁。

114 柳田1998(1928)『全集』4巻、137頁。

115 柳田1998(1928)『全集』4巻：133頁。

116 柳田1998(1928)『全集』4巻、135頁。

117 柳田1998(1928)『全集』4巻、138頁。

118 柳田1998(1928)『全集』4巻、146頁。

119 柳田1998(1934)『全集』8巻、109頁。

120 柳田1998(1928)『全集』4巻、146頁。

121 柳田1998(1928)『全集』4巻、146頁。

表2 FolkloreとEthnologyの訳語 (訳語のあとの(?)印は、推定)

	論題名	Folklore	Ethnology	Ethnography
1920年9月～	慶應義塾大学講義	民俗学(?)		
1922年11月	『祭礼と世間』小序	Folk-Lore		
1924年4月～	慶應義塾大学講義	民間伝承論		
1925年10月	講演「郷土生活といふこと」	フオクロア		
1925年4月	『海南小記』序		民族学	
1926年4月	講演「日本の民俗学」		民俗学	
1926年5月	講演「Ethnologyとは何か」		民俗学	
	⋮			
	(中略)			
	⋮			
1930年4月	講演「民間伝承論大意」	民間伝承論		土俗誌
1930年6月	「東北と郷土研究」	フオクロア(自国民俗学) (ナショナル・エスノロジー)	民俗学 (諸国民俗学)	民俗誌
1931年1月	『明治大正史世相篇』	Folklore		
1931年5月	東京文理科大学講義		民俗学(?)	
1931年9月	「郷土研究の将来」	フオクロア (一国民俗誌学)	民俗学 (比較民俗誌学)	民俗誌
1932年4月	「郷土史研究の方法」	一国民俗誌学 日本民俗誌学	民俗学 万国民俗誌学	民俗誌学
1932年9月	講演「民族の採集と分類」		民族学(?)	
1932年12月	東大農学部農業史講義	民俗学(?)		
1933年2月	講演「何のために方言を集めるのか ——民俗学と言語学との間」	民俗学(?)		
1933年5月	講演「民俗学の話」	民俗学(?)		
1933年9月	民間伝承論講義	民間伝承論	土俗学or殊俗学	
1934年10月	講演「日本民俗学の提唱」	日本民俗学		エスノグラフィ 殊俗誌
1935年11月	講演「今日の民俗学」	日本民俗学		
1935年12月	「採集期と採集技能(のちに 「実験の史学」に改題)」	日本民俗学(民俗学)	土俗学	土俗誌
1936年4月	講演「郷土研究と民俗学」	民俗学(日本民俗学)		
1937年1月～	講演「童神論」	日本民俗学	民族学	エスノグラフィ 殊俗誌
1937年5月～	東北帝国大学講義	日本民俗学	民族学	

への過渡期的な国情であるがゆえに、今ならば、フォクロアの資料を歴史へと転換する方法が構築されるという、いわゆる蛮民社会への応用が期待されると位置づける一方で、いずれ行き詰まるものと冷徹に見据えられていたことも銘記しておく。

5. 『民間伝承論』を失敗とした理由

柳田自身によって後年なぜ『民間伝承論』は失敗と位置づけられたのか、石田の問題提起に応じていこう。柳田がそう呼んだ1947年の「現代科学といふこと」から検討するが、「民俗学を古い世の穿鑿から足を洗はせること、即ち之を現代科学の一つにしなければならぬといふことは、実はこの十年前の講義に於て私が言ひ出した」¹²²という文章で有名な論考である。ここでいう講義とは1937年に東北大学で行った「日本民俗学講義」を指すが、受講生であった大島正隆の詳細なノートが公表されている。部分的にそれも使って補いたい。

序でも引用したように、失敗は①に「筆記のさせ方が悪かつたので誤りが多い」こと、②に「その上に是非言ふべくして言っていないことが幾つか有る」として、「その一つは日本の民俗学が、他の国々の真似をしてはならぬ理由、全体にどの国にも国としての特徴は有るのだが、日本は殊にそれが多し」¹²³というところまでは、はっきりしている。これを②-1としておくが、柳田の文章は③なり④とかいったように、並列的な構造とはなっておらず、理由はあまり明示的には論じられていない。筆者が見るところ、のちに続く文章は②-1の具体例が枝分かれ的に示されているように思われる。

②-1の他国を真似てはならない理由で、殊に日本に多いことの一つとして、「我々の民間伝承は他の国と比べて、よほど歴史といふものに接近して居る。……民俗学と史学とは、日本に於ては他人では無い」¹²⁴ことを挙げている。②-1-aと呼んでおくが、むしろ両者は似通うあまり「境目を明らかにする必要が痛切」であり、「この事を一通り説いて置かうとしなかつたことは、今から考へると」、遺漏があったとする¹²⁵。史料の空隙を埋める意義は『民間伝承論』でも十分説かれており、鏡としての歴史学の現代性や、歴史学との住み分けに議論の重心があった。

②-1-bとして、戦後直後で「殊に今日は過度の中央集権の後を受けて、地方生活の充実、自治の振作に力を入れなければならぬ時代」であり、「民俗学の大きいその機能を実現すべき」時世になった¹²⁶と論じている。石田のいう「より切実な問題」に相当しよう。その具体例として「小さな例」として挙げているのはお辞儀であり、

122 柳田2004(1947)『全集』31巻、386頁。

123 柳田2004(1947)『全集』31巻、385頁。

124 柳田2004(1947)『全集』31巻、385頁。

125 柳田2004(1947)『全集』31巻、385頁。

126 柳田2004(1947)『全集』31巻、386頁。

127 柳田2004(1947)『全集』31巻、388頁。

128 例えば『明治大正史世相篇』の第5章「故郷異郷」の4節「世間を見る眼」で、「国民の氣質が歴史を決定したのは、ワニルだけでは無い」と述べている(『全集』5巻、449-451頁)。ワニルとは人見知りする、恥づかしがって尻ごみをする、照れ笑いの意である。

129 柳田2004(1947)『全集』31巻、390頁。これに加えて「第二にはさて是からはどういふ風に進んで行けばよからうか」という未来の問題も含めている。解決においても同じ「島帝国に根を生やしている民族だから、さう飛び離れわざも出来ず……僅かづゝの模様替へによつて……運んで行くより他はない」とし、「身体髪膚を始めとし、言葉でも感情でも物の見方でも、以前の引継ぎ持送りに終わるものが多い」とする。たとえ根こそぎ取り替えるとしても、「一応は今日までの経過」を「知り且つ批判しまた反省しなければならぬ」と述べている(『全集』31巻、390頁)。

130 柳田2004(1947)『全集』31巻、391頁。

131 柳田2004(1947)『全集』31巻、391頁。

132 柳田2004(1947)『全集』31巻、392頁。

133 柳田2004(1947)『全集』31巻、392頁。

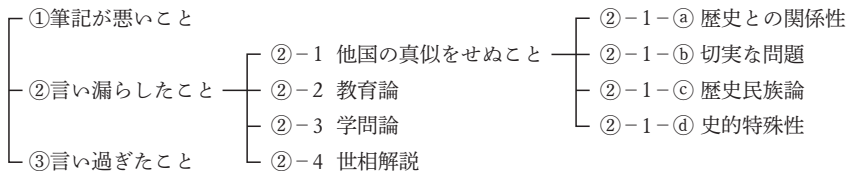
「人の顔を見るとにこへすること……是は慣行とも又伝統ともいふべきものであつて、古い処に理由はあり、「一段と重々しい民族的原因ともいふべきもの」¹²⁷だとする。柳田の他の著作¹²⁸でもしばしば説かれたワニルやはにかみの問題であるが、これを「一段と重々しい民族的原因」とするように、前節で論じた「歴史民族論」にまで論が及ぶ。このような理由を、②-1-③としておこう。

これに続けて「今一つの最大の問題」として挙げるのは、②-1-④とするが、「どうして此様に(かくも浅ましく戦争に)負けてしまったのか」¹²⁹(括弧内は引用者補足)であり、「在来の史学が取扱はぬ事実で、我々の民俗学が引き受けなければならぬ歴史」だとする¹³⁰。軍部の力の強大過ぎたことが主要な直接的原因だとしても、「斯くあらしめたもう一つ前の原因」、例えば武力を以て国勢を大きくした前の三つの戦争を、「可能ならしめた経済上の条件」の一方に、農民を再度軍人に育て上げた兵農一致の制度を「喜ばしい復古の兆候と考へてゐた国民の気風」や、「少数有識階級の指導力」を否認または抑制する代わりに、自分たちだけが権能あるその地位に昇り進む風潮が、「名ばかりの機会均等で少数成功者の我慢をする社会」を作り上げたとする¹³¹。前節で述べたような「史的特殊性」に基づくものとして把握されている。

その一つ一つも、さらに他の複合した(史的)要因から成り立っていると柳田は論じるが、そのうちの大きな要因の一つとして教育の方法を挙げる。②-1-③とも見做せるが、それを②-2としておくと、明治以来の教育が群れを抜く力の育成と、「従順なる少しも批評せぬ民衆」を多く作ろうとしてきたとし、「賢い少数の者に引き」回され「判断を長者に一任するといふ素朴さ」は、「国民の美点」だったかもしれないものの、弊害があるなら改良しなければならない¹³²と説いている。事大主義や付和雷同という「民族的原因論」とも関わった論述となっている。

これに関連して、「疑問から学問は出発しなければならぬ」¹³³という学問論も展開される。これを②-3としてみたいが、具体的事例として「ツマラナイといふ形容詞が新たに始まつた」ことを挙げ、「この一語を以て片付けられる生活体験が多くな」り、この「簡単な

表3 『民間伝承論』が不如意だった点



一語を設けて、新しい運動に対立するすべての前からのあるものを排除し、同時に比較検討を断念させ、若い者の余りに考へ深くなるのを防いでみる」と説く。「何故に父母妻子を家に残して、死にゝ行かねばならぬかといふやうな、人生の最も重要な実際問題までが、もう判りきつてゐることになつてゐた」とし、「かういふ言葉の流行こそ、もう少し原因を尋ねて見るべき現象だと思ふ」¹³⁴としている。これを②-4と捉え、このような流行現象への着眼を一種の「世相解説」だと見做しておこう。

以上は柳田が自身で述べた失敗の理由¹³⁵であるが、これに対し『文庫版全集』の解題で、福田アジオは「歴史研究の問題点の指摘、歴史研究としての民俗学ということについては少なからず頁が割かれている」。したがって、失敗の理由は「民俗学と人類学(民族学)との関係を強調した点にあったものと思われる」¹³⁶と推定する。石田の評価を裏返しした内容となっているが、ある意味で、これらは②の「言い漏らし」とは正反対の、言ってしまったことの修正、つまりは「言い過ぎたこと」であって、③という別な枠組で括りたい。福田の指摘は重要なが、細かな論証を経ていない。二つの概論書の比較対照に論点を移そう。

6. 転換点としての『民間伝承論』——『郷土生活の研究法』との相違

最初に述べておくべきは、『郷土生活の研究法』と『民間伝承論』の違いは、単に素人向きと専門的というレベルの差だけではなく、前者は「郷土研究」の延長として、後者は日本版のフォクロアの書として、書かれた著作だという基本的な事項の確認である。前者が「郷土研究の第一義は、手短かに言ふならば平民の過去を知ること」¹³⁷だとして、「私たちの学問」であった「歴史民族論」や「史的特殊性」に重きが置かれていることに対して、後者はあくまでフォクロアの書であり、エスノロジーとの関係性も詳論されるのは、ある意味当然のことだといえる¹³⁸。ただし、『郷土生活の研究法』にも、福田の物謂いを借りれば、エスノロジーとの関係性は「少なからず頁が割かれている」。その言い方だけでは説得力を欠いており、論述された内容の質が問われねばならない。

『民間伝承論』においてまずは特徴的だと判断される二つの言説を取り上げれば、第一には第10章の「心意諸現象」における「思想善導などといふことはもとより我々の学問の領分ではないが、其方面にも幾分の貢献はなし得る点もあると信ずる。フォクロアは決して社会の実際から離れた高踏的な学問ではない」¹³⁹という表現であ

134 柳田2004(1947)『全集』31巻、389-393頁。

135 柳田は1937年の「童神論」で、「私などの立場は、いくら出来そこないのまづい本でも、すでに総論の書(民間伝承論)を公表している以上は、あれが手枷・足枷になって、自由に今思つてゐることを時立てることが出来ない。これからいふことがあの通りなら、読んでいただく方がずつと早いし、一々改訂していると、『いいわけ』を聴かせに皆様を招待したことになる。だから自分の本は、別字通り棚上げておいて、別に自分の学んできた順序、まごついたり、突き当たったりしながら、ここまで辿つてきた荆棘の路とでもいうものを、ぼつぼつと語らせてもらう他はない」と述べている(『全集』33巻、381-382頁)。これに従えば、石田のいうように、戦後に至って初めて『民間伝承論』を失敗と見た訳ではないことがわかる。

136 福田アジオ「解説」『文庫版全集』28巻、1990年、643頁。

137 柳田1998(1935)『全集』8巻、202頁。

138 前者には「目標は現実疑問の解答に」(『全集』8巻、255頁)や「自ら知らんとする願望」(同、260頁)、「学問の実用」(同、260頁)や「学問救世」(同、261頁)という言葉が多用されるのに対し、後者には「重出立証法」(同、62頁)という民俗学の資料操作法が初出として現れる。また後者にも「遠方的一致」(同、72頁)や「沖繩の発見」(同、74頁)も挙げられるが、前者のように見出し語にはなっていないなどの差がある。

139 柳田1998(1934)『全集』8巻、193頁。

140 柳田1998(1934)『全集』8巻、32頁。

141 両者の近接性を説きながらも、本質的に両者を異なるとする矛盾を、『民間伝承論』は抱えている。「婚約」というフレーズは、たぶん後藤による渉猟の結果だろうが(『青年と学問』からの引用)、いずれにせよ、過渡期的な段階での作品だと判断した。

142 柳田1998(1935)『全集』8巻、235頁。

143 柳田1998(1935)『全集』8巻、214頁。

144 「従来の採集記録」が「徒に数を誇り珍種を欲しがり」という箇所(『全集』8巻、223-224頁)と、「民間伝承の採集に当たる人々の得て陥り易い二つの迷断、……頻りにその珍しさを強調するもの、こんなことは尤もふれた世間並だらうと思つて、一向に注意を怠るもの」という箇所(同、227頁)である。

145 ただし、『民間伝承論』ではEthnographyに関して「旅人の長処は異郷人の物珍しさを以て、其土に住む者の通例として気にも留めない生活事相を、大小によらず見て来る点」(『全集』8巻、35頁)と論じている。『郷土生活の研究法』では「旅人はたゞ有形の文化の、目につく一部を筆にして去るが、それでもあまり行かぬ所ならば珍しがられ、少々は法螺があつても今までは摘発されなかつた」と述べている(『全集』8巻、233頁)。

146 柳田2014(1964)『全集』34巻、146頁。

147 柳田1998(1934)『全集』8巻、68頁。

る。思想善導といった例えば公民教育などは、フォクロアの領分ではないが、フォクロアも成長すれば、接続可能な範囲だとした前述の「郷土研究といふこと」と同じ認識の上に立っている。戦後の「現代科学といふこと」では、民俗学の現実生活の諸問題へ関与する度合いが遙かに進展しており、民俗学こそが現実問題に深く関わるべきだと説いたことは、前節で既に概観した。

第二に注目されるのは、「日本で将来完成すべきフォクロアの学問を、是非とも民俗学と訳さうといふ説があるならば、それに私は反対しない。……たゞ一つの条件は一面の類似をもち、しかも方法と本質を異にするエスノロジーを『民族学』と同音で訳しては困るといふこと」¹⁴⁰(傍点引用者)だとする箇所である。フォクロアとエスノロジーが「方法と本質を異にする」という言い方は、前々節まで詳解してきたように、これまでは「フォクロアとエスノロジーとの婚約」¹⁴¹など、両者の近接化や類似性が説かれていたはずである。明らかに異なる地平に移相している。『郷土生活の研究法』でも実は「学問の相互映発」や「相互啓発」¹⁴²を説くのみであり、結論を先取りしてしまえば、「方法と本質を異にする」という逆転した言説は、『民間伝承論』以降に顕著に見られる言い方なのである。

これらと深く関連していると判断されるのは、冒頭から論じてきた、珍奇なものを蒐集し配列してきたのはフォクロアだとする認識の転換である。『民間伝承論』でもそうした珍奇主義が強調されているのに対し、『郷土生活の研究法』では英国のフォクロアという言葉が生まれる30年ほど前から調査は始まっていたという箇所に、次のように出ている。すなわち「最初はただ単に田舎人、もしくは時代の文化からやゝ後れて生活して居る者の間に、誰でも気のつく珍しい風習行事、または説話歌謡を拾い集めるうちに、「比較の調査が進んで、それらの奇事異聞と同じ事柄が、国の内外に分布し、且つ古く前代にあつたことが判」¹⁴³ってきたという箇所である。このほか二箇所に類似の表現があるに過ぎず¹⁴⁴、民俗学に向けての珍奇だという叙述は、極めて控えめになっている。

この二書ではエスノロジーに対し、そうした形容はしていないが¹⁴⁵、1940年の草稿とされる「比較民俗学の問題」では、「民俗学 Volkskunde の比較研究は、動機も方法もよほど一方の所謂民族学 Völkerkunde とは違つて居るものと思つて居る。あちらでは大体に人の生活は互ひに近いものとして、何か甚だしく異なつて居る点があると、それに注意し又其わけを尋ね究めようとして来たやうである」¹⁴⁶(傍点引用者)と記している。エスノロジーを「あちら」へと彼岸視すると同時に、明瞭に、人類の共通性の下、違いや珍奇に注意してきたのが民族学だとして、これに対して民俗学の方は「『わかつて居る』『当たり前』といはれて居る其奥の真理を洞察する」¹⁴⁷学

問だという、当たり前を問う性格が強調されてゆくのだ。『郷土生活の研究法』の「世の常の推移」¹⁴⁸や『民間伝承論』の「凡俗知識の研究」¹⁴⁹などの語が示すように、珍奇主義から当たり前あるいは平凡への転回である¹⁵⁰。

前者から論じていけば、1937年の講演「童神論」では、「エスノグラフィ即ち私のいう殊俗誌の愛読者」は「奇抜な奇習異俗が伝わっていることを求めるとしたり」¹⁵¹、戦後になるが、1947年10月の講演「二つの人類学」でも、「文化人類学は間口が広くて民族学と民俗学とに分けられるが、共に研究方法として比較法を使ふ点は同一である。民俗学は自分の身の周りの疑問から出発し、民族学は他民族の珍しいことから始めて行くとし」た上で、「二つの区別が永遠のものではな」¹⁵²(傍点引用者)いとしたり、以降の柳田は終生、民族学は珍しいことに対する動機や好奇心が潜んでいるとみて、これを区別した。珍奇主義を民俗学の専売特許から、民族学の方の特徴へと移動させることで、両者の違いを差異化していったのだ。ここに一番の断絶がある。

両者の違いの強調は、動機や好奇心だけに留まらない。1937年の東北大での「日本民俗学講義」では「混乱されて困る点は何か。それはDataの、事実のちがひ方」¹⁵³だとして、方法や本質が異なってくるのは、データの質の相違に起因するからだとして述べている。「エスノロジーの材料は一つでも材料になるがFolkloreのそれは二つや三つの孤立したDataでは不安なのである——それが珍しい物であればあるほど」¹⁵⁴と述べ、入れ墨を実例に、エスノロジーの方はサモアやフィジーなどのそれは写し取って来さえすれば、研究可能であるのに対し、民俗学の方はその「生残つた姿は非常に微妙であ」って、それらを多数集めることにより、「国民生活誌」が明らかにされるのだとする。「我々の学では材料の姿が非常に微妙であるため、民族学では必要のない非常に苦しい綿密な方法をとつてゐる」¹⁵⁵と、不確実なる資料がゆえに、その資料操作においては、重出立証法という「厳正主義」¹⁵⁶が採用されねばならないと論じられる。

別の表現を引くならば、「日本の民俗学は一つの言葉、一つの信仰、一つの国土に住み、一つの方向に向つて遅速こそあれ同じく歩んできたもののその遅速の度合を見得るのであるから、Ethnographieなどに比しずつと確実な出発点を持つ」とし、「一方に於て、重出立証法を重んずると共に我々は一つきりないユニークなもの珍奇なものなどを忌む！これはこの確実さを保たんがため」¹⁵⁷(傍点引用者)だと断ずるまでに至っている。

1937年の講演「童神論」でも、民俗学の扱うデータの存在形態が「民族学と比べてかなりの特異性があり、同じ習俗を論じるにせよ、民俗学の方は「一言で言うならばやけている」と表現し、かつ「土地

148 柳田1998(1934)『全集』8巻、218頁。

149 柳田1998(1934)『全集』8巻、16頁。また『民間伝承論』では「平素の常民大衆の生活の如き、下等にして有りふれた当然のことは、記録する価値のないものであつた。そして彼等の生活が変化するというやうなことは知られず、いつまでも不変で永続するものごとく考えられて居た」とも述べる(『全集』8巻、51頁)。

150 例えば「平凡人の平凡生活」(『全集』25巻、306頁)を追究すべきだとする言明は、「雑誌は編集者の業」(『土俗と伝統』1巻1号)で1918年から表わされていたが、その頃の柳田は専ら山人や漂泊民を追い求めたように、農民の日常生活からは遊離していた。益田勝実は昭和初年における柳田の転回を、「伝説の(怪奇)を追うことから、平民生活の(日常)を追うこと」に転じ得たと論じたが(『解説 柳田国男の思想』『現代日本思想大系29 柳田国男』筑摩書房、1965年、50頁)、それは珍奇なるものから日常への転回だとも言い得る。ただし、柳田は『遠野物語』の直前の1908年の「事実の興味」(『文章世界』3巻14号、146頁)においても「私は此頃昔の凡人の心持ちを研究しやうと思つて地理書を読んで居るが、なかなか興味の深い」(『全集』23巻、613頁)と述べるように、珍奇(非日常)と平凡は必ずしも対立的なものではない。

151 柳田2005(1960)『全集』33巻、390頁。

152 柳田2004(1948)『全集』31巻、443頁。

153 柳田2015(1990)『全集』35巻、12頁。

154 柳田2015(1990)『全集』35巻、12頁。

155 柳田2015(1990)『全集』35

巻、13頁。

156 柳田1998(1934)『全集』8巻、61頁。

157 柳田2015(1990)『全集』35巻、24頁。柳田は「童神論」で、一貫している南方熊楠の方法を、「即ち日本の珍しい社会事相をとりあげて、それを解説する為に諸子百家・仏法の経典はもとより、遠き西洋の古典をも援用するのみか、似よつた未開人の習俗信仰を非凡な記憶と連想力をもつて、悉くこれを例にとろうとする。そうして似てさえいえれば説明になると認め、どうして似ているかまでは考えない。……半世紀前の英国の学説に力強く影響せられている」と評している(『全集』33巻、389頁)。

158 柳田2005(1960)『全集』33巻、407頁。

159 柳田2015『全集』35巻、777頁。

160 「日本民俗学」に移行したといっても、例えば1935年11月4日の鳥取師範郷土研究会での「今日の民俗学」(『全集』29巻、364-371頁)や1936年4月20日の佐賀民俗講演会「郷土研究と民俗学」(同、382-405頁)のように、日本の付かない「民俗学」の語もまま頻出する。

161 1937年の講演「童神論」でも、「日本民俗学という名前は、幸いに中央・地方の同志者の協力によつて、最近になつて漸く確立した」と述べている(『全集』33巻、381頁)。

162 柳田2002(1936)『全集』29巻、382頁。

163 柳田2002(1936)『全集』29巻、383頁。

164 具体的には「例へば性的信仰の資料を集めるとか、若しくは奇行のあつた、へんてこりんな人

毎に妥協した改造せられ」、「一つ一つの現象はまず少しでも自分を語っていない」と指摘する。「総合の事業にはタクトが必要」で「その代わり……比較と排列とによつて追々にその経路を跡付け」¹⁵⁸られるとするが、「ぼけている」とは資料の断片性を指している。微かな痕跡や断片から、その集積と整理によって、経路だけは跡付けられるとする。すなわち経路、今に至る習俗変化のプロセスを描くには、『産育習俗語彙』(愛育会、1935年)をはじめとする一連の民俗語彙の蓄積と索引化という地道な編纂事業と、パラレルな関係にあったことを改めて確認しておこう。

7. 「日本民俗学」の提唱とその確信

1934年10月27日の大阪女子専門学校での講演「日本民俗学の提唱」で、柳田は「私は最近に日本民俗学は成立つ事が出来るだらうと考へる様になつた」とし、「私がいかなる気持で、かゝる確信をしたのかそれを述べる」¹⁵⁹と明言し、「日本民俗学」¹⁶⁰と確信的に名乗ることを宣言する¹⁶¹。1936年6月の講演「郷土研究と民俗学」では、「以前はよく自分等の仕事を郷土研究」と呼んできたが、「それが近頃になり私が率先してでは」ないものの、「『日本民俗学』といふ事を云ふ様になつたと顧みる」¹⁶²。後者から補足すると、「郷土研究といふ言葉が余りに普通なものになつて終つた」¹⁶³からで、「骨董道楽、蒐集道楽」¹⁶⁴といふものから蟬脱して、学といふからには、社会に認められる仕事をせねばならない。かたがた、民俗学といふ言葉を使つた方が、もう時節ぢやないかと思はれた」¹⁶⁵とする。

1937年の東北大の「日本民俗学講義」でも、「日本でもこの語(フォークロア：引用者注)を使はうと思つたこともあつたが農村等でのこの言葉を使ふことは困難であり、又横文字の言葉を用ふことは避けられた方が理解が早い」¹⁶⁶とし、堂々と「日本民俗学と題して講義するのはこれが始めて」だ¹⁶⁷と強い自信を漲らせている。「電気と伝記の差ならよいが事実にて、民族と民俗との内容の混同がある。ところが頭に日本をくつつけると、Ethnologyとは区別される……どうしてこんなに迄して混同を防がねばならぬのか。大変沢山の類似点があるから、人によつては一緒だと思つて人さえあるから」¹⁶⁸だとする。混同されて困る理由は、前述したように、資料のあり方からくる両者の方法と本質の差異だが、柳田に民俗学の「学」としての確立を確信させたものとは、一体、何だつたのだろうか。

「日本民俗学の提唱」と「日本民俗学講義」で共通に語られているのは、心意現象としての伝説の存在である。口承文芸としての伝説ではなく、〈信仰としての伝説〉として、「宗教以外の心意現象」を

解明する見通しがほぼ立ったことが述べられている(ただし、「日本民俗学の提唱」では時間切れになったためか、沢田四郎作による講演筆記録は「古い信仰を忘れぬ様にする事」¹⁶⁹という尻切れトンボな言葉で終わっている)。「宗教以外の心意現象」とは、「信仰以外の心意現象」に力を入れているとか、「全部禁忌は起原を古い或一つの宗教観から導くものゝ様に理解するあやまりがある」¹⁷⁰とも表現される。現在の日本に「多くのかうした気持や考へ方は宗教以外に基くもの」がかなりあり、外国でも「一国特有の道義観」や「ナスベキコト、ナスベカラザル事」など、「民族毎にあるいは民族の一部だけに持つて居る旧くからの約束で、言葉が知られてないために、他に知られぬもの」が数多いとする。「生甲斐といつた様なものであつたり、願望や好みきらひ、人生の幸福といつた様な色々な形をとるもの」で、日本では確かにある「復讐心、これはどの民族も一様に持つて居るものではない」¹⁷¹としている。『民間伝承論』でいう「趣味・憎悪・気風・信仰など」¹⁷²に該当しようが、「稍もすると一民族は五百年千年を隔てゝも違はず、千古一貫して信仰や信念を持ち続けて居る如く考えられるが、そんな筈はな」¹⁷³く、「我々の民間伝承研究が、……今までの方法の誤りに気づいた」¹⁷⁴とするのは、おそらく W. ザントの民族心理学の批判でもある。

これに加えて「今一つこれも我々の若い者の間でよく見るのは集合力の尊重、平凡でもいい多数に従ふ気持——淋しがり、一人と多数、笑はれることを恐れる気持」にも言及する。「江戸のケンカ、沢山の第三者の批判を予期しそれを笑はせることを予期する絶妙な警句、相手だけが笑はないときその相手は負け」¹⁷⁵だとして、「かかる気持が可成我々の自由な気持を束縛」するが、「誰がかかる問題を管理するか。今日までの史学ではこれを取扱へない。我々の方法はこのことを担ふ義務」¹⁷⁶を負うとも論じる。『明治大正史世相篇』でワニルに続けて論じた、喧嘩は一種の社交術とする一節に通じている。

『民間伝承論』でも伝説は、三部分類の二部と三部の架け橋となるとされるが¹⁷⁷、昔話とは違って「信じられている」ことに特徴のある伝説を、「日本民俗学講義」では、その分析から歴史的プロセスとして読み解く実例が二つ示される。具体例に沿って内容を追うと、苗字のことが木地師と小倉姓、鈴木姓と熊野信仰の広がり、小野姓と猿女の関係などを例に論じられる一方、地名や山言葉・マタギのアイヌ起源説¹⁷⁸を詭弁だとして退ける。『郷土研究』誌上で繰り広げてきた、文化運搬者としての漂泊民の、定住農民社会に与えた影響を要領よく紹介するとともに、もう一つの実例を説いてゆく。十三塚伝説の紹介から始まって、伝説の二形式である Simplex と Complex の相違¹⁷⁹を、白髭水伝説と白米城伝説、炭焼長者伝説の錯綜性を詳論しながら、宇佐を中心とした八幡信仰や東北のオシ

の事蹟を調査するとか、その人達の意図するところは、人々がアッと驚くであらう事をひそかに期待して居る」のであり、「当世流行の言葉で云へば、グロテスクとか、エロチックとかいはれるさういふものを集め、それで珍らしいと云はれ、通がらうといふ気持を持つて居る。かういふ行き方は、民俗学の現在進みつつある道筋とは別な」のだと述べるように(『全集』29巻、393-394頁)、「飛んでもない処まで進出」する懸念は次第に払拭される傾向にあった。

165 柳田2002(1936)『全集』29巻、393頁。

166 柳田2015(1990)『全集』35巻、10頁。

167 柳田2015(1990)『全集』35巻、9頁。

168 柳田2015(1990)『全集』35巻、10頁。この引用のあとに、「この誤解を強くした二つの原因」は、VölkerkundeとVolkskundeとの「単数と複数だけのちがひの言葉でこれが日本人の頭に Ethnology とは Volkskunde を包含したものではないかと考へ」たことと、「民族学の問題の取扱ひ方、大は小をまかなふ気持、例へば最近鹿児島県十島中の一つ悪石島に行った」早川孝太郎の報告や、誰が見ても Völkerkunde の研究ではない、例えば渋沢敬三のアシナカの研究などが、『民族学研究』に掲載されることを指摘する(『全集』35巻、10-11頁)。

169 柳田2015『全集』35巻、783頁。

170 柳田2015(1990)『全集』35巻、48頁。

171 柳田2015(1990)『全集』35巻、48-49頁。

172 柳田1998(1934)『全集』8巻、175頁。

173 柳田1998(1934)『全集』8巻、177頁。

174 柳田1998(1934)『全集』8巻、176頁。

175 柳田2015(1990)『全集』35巻、49頁。

176 柳田2015(1990)『全集』35巻、49頁。

177 柳田1998(1934)『全集』8巻、162頁。

178 「比較民俗学の問題」では、「一つの極端な例は地名のアイヌ語解釈」が日本では今も続くことを批判し、「地名などは人口が多くなり、土地との因縁が濃くなって、始めて之を付与する必要が生じたことは判つて居る」とするが(『全集』34巻、144頁)、自身も『遠野物語』の初版本ではアイヌ語による付会を註に補った。自らの地名研究の進展により、1935年の増補版では落とされている。

179 伝説には発生経路に、長い話を短くしようとする普通人の語りと、その逆になるカタリベや専門家による複雑なプロット化する語りの二通りの形式があるとし(『全集』35巻、139頁)、柳田は流布形態と合わせて、話に歴史が付着する、心意現象としての伝説に、歴史を読み解いた。1940年に岩波新書として上梓された『伝説』は、その一つの頂点といえる。

180 柳田2015(1990)『全集』35巻、98頁。「童神論」では若宮信仰を実例にして、「これは日本でなければいけないことであり、何か前代に理由がなくては存しえない事実であり、……いわば埋もれたる未来の智識」(『全集』33巻、406-407頁)だとし、「たつた一つのこの系統の伝説は、現在なお僅かな変更、合理化、歴史との折合をもつて無数に行なわれている」(傍点引用者、同、416頁)と論じている。

ラサマの歴史過程が読み解かれる。このように柳田は、伝説には歴史の足跡が付着するのだと捉えており、〈信仰としての伝説〉とは、こうした歴史の重層性を析出することを指している。東北文化には「江戸期になってから外から入って来たものの文化的貢献」が多だったと¹⁸⁰、その文化相がそう古くからの連続性には基づいていないことも解き明かしている。

8. 世界的一致と国内遠方の一致——問いかける比較民俗学

先にも紹介した「比較民俗学の問題」¹⁸¹で、柳田は「とにかく日本民俗学と我々の称へて居るものは、右の災難に苦しめられた御蔭に成長した」¹⁸²と述べている。この論考は『朝鮮民俗』に寄稿した「学問と民族結合」の草稿とされ、1930年代の雑誌『民間伝承』創刊や各種民俗語彙の編纂に邁進した以降の、柳田の思惟が窺える貴重なものとなっている。右の災難とは「再び先進の独断を暗唱して、之を守らぬ者を異端と呼ぶやうな時代に復らうも知らぬ」¹⁸³ということであり、日本独自の民俗学を築いてきたという自負に溢れている。

朝鮮を見てきた弟の松岡映丘が発した「万葉が歩いてる」¹⁸⁴という言葉に反応し、柳田は比較民俗学の問題を考える上で、例えば朝鮮と旧日本の比較において「たゞ直観的な第一印象によつて、斯んなにも双方よく似通うた生活ぶりがあるかと思ひ、本来無縁のものならばこの様な一致はある筈が無いなどゝ、半ば感歎の声を放つて居た人たちが、……力を落とさねばならぬ結果を見るからである。しかしさういふ発覚は早晩は免れない。夢は崩れるけれども学問は精確になる」¹⁸⁵と述べた上で、次のようにいう。

始めから似て居る筈が無いと思ひ、たまへ争へない一致が見付かると、非常に驚歎して不審を晴さずには居られぬのである。此仕事は縁の遠い異民族の隅々まで行届いて、始めて大きな効果が得られる……最近芬蘭のF・F・Cから独逸の或学者の研究した支那の民間説話の総索引のやうなものが刊行された。是を見て行くと……西洋の説話集の幾つかに採録されたのと同系のものが半ばに近く、その又大部分が日本にも朝鮮半島にも、ほんの僅かばかり形を変へて、共に行はれて居るといふことがわかる。此書が出なかつたら西洋の学者はいふに及ばず、我々も亦単なる日鮮の間の一致だけを珍重して、どういふ結論に進んで居たか知れない¹⁸⁶

F・F・CとはK. クローンによって1907年に設立された『Folklore

Fellowes Communication (民俗学連盟通信)』の略称で、独逸の或学者の研究とは、W. エバーハルトの『*Typen Chinesischer Volksmärchen*』Helsinki 1937のことである。この書がなかったら「我々も亦単なる日鮮の間の一致だけを珍重して」いたかもしれないという思いは、『郷土生活の研究法』でも「私なども最初は少なくとも孤立の国だから、印度支那朝鮮から学んだものゝ若干あつても、他は悉くこの国の固有のものであらうといふ心持を以て、昔話の蒐集を始めた」が、「ところが結果は決してさうではなく、到底その伝播の経路が分りさうもない話に、幾つとなき全世界の一致のあることを知つた」¹⁸⁷という言に、暗に示されていた。汎世界的な一致を十分認識した上¹⁸⁸で、あえて国内における遠方の一致を追求することで、柳田は1927年の「蝸牛考」以来培ってきた周圏論を用いて、微かなる生活断片を、「事実資料の集積と整理」¹⁸⁹という土台を礎に、歴史的な変化のデータへと変換し、「国民生活誌」を描き出す手法を編み出していった。「比較民俗学の問題」で、「元来我々の歴史科学といふものが、実は今まで起原論に囚はれ過ぎて居た。中間の千年は百年の推移といふものを無視して、元が一つだといふ証明ばかりを念掛けて居た」とし、「民俗語彙などは数多く集めて見ると、其名を支持して居た人々の心持までが現はれて、……鎌倉期以前は遡り得るものは珍重してよい程しか無い。半島の方でも恐らくはさうだらうと思つて居る」¹⁹⁰と述べている。柳田のいう「宗教以外の心意現象」とは、このような民族的原因に規定される「内的特殊性」の追究とみて、国民＝庶民の心持ちの推移によって把握されるものだと考えてほば間違いない。

「童神論」の結語では、「一つの宗教の特質としてでなく、それとは歴史の上で何の縁もない、色々の国民の信仰生活に、たとえ終りには異なる結末に導かれようとも、少なくともその考え方の起源がこれほどよく似ているという事実は何を意味しているのか」¹⁹¹と述べている。よって、とりあえず、そう解釈しておく。1937年の「山立と山臥」の中で柳田が、修験道という異彩を放った信仰の歴史的発生を論じつつ、山伏の気質と習慣が日本人の気風に刻みつけた側面を探究すべきだ¹⁹²としたことも、それと深く関わってこよう。

おわりに——『民間伝承論』における珍奇の強調

以上、石田の問題提起に曳かれて、『民間伝承論』が封印された理由と1920年代から30年代前半の柳田民俗学の形成期の原点を探索してきた。要点を三点にまとめ直すと、第一に、当時、柳田以外の「民俗学」が自称された著作や論考に、その初発において珍奇

181 鶴見太郎によれば、この草稿の冒頭には1956年2月12日の日付のメモがあり、原稿末尾に「石田君ノ室ノ人ニ考ヘテモラフカ」との書き入れがあること紹介する(『柳田国男とその弟子——民俗学を学ぶマルクス主義者』人文書院、1998年、196-197頁)。研究所解散直後の日付であり、解散発言が石田への感情的な批判によるものではなかったことを推定させる。

182 柳田2014(1964)『全集』34巻、141頁。

183 柳田2014(1964)『全集』34巻、141頁。昭和初年に外国民俗学の翻訳が相次いだこと、および「論理の飛躍を忍んで、比較を縁の遠い蛮夷の間に求む」傾向を指す(『全集』8巻、31頁)。『郷土生活の研究法』では「殊更に不自由な外国の例に範をとつて、強ひて笑ふやうな又驚くやうな事柄に限つて、拾ひ集めて勝手な憶測を逞うしようとしたことは……甚だ面目のない話」だと述べている(『全集』8巻、217頁)。

184 柳田2014(1964)『全集』34巻、139頁。

185 柳田2014(1964)『全集』34巻、144頁。

186 柳田2014(1964)『全集』34巻、146頁。

187 柳田1998(1935)『全集』8巻、254頁。

188 『遠野物語』でも、第22話の註に「マーテルリンクの『侵入者』を想ひ起こさしむ」とあるが、それを回顧して述べた「己が命の早使ひ」で、第27話の話が『今昔物語』にも中国の『山東考古録』にも類話のあることを示し、「仮に偶合であるとするれば、何故に人の頭脳の中にかういふ思ひ懸けぬ空想が発現したか……宇宙第一の不思議は、人間その物」だと述べている(『全集』20巻、

331-333頁)。

189 柳田2014(1964)『全集』34巻、142頁。

190 柳田2014(1964)『全集』34巻、144頁。

191 柳田2005(1960)『全集』33巻、421頁。

192 柳田1964(1937)『定本』31巻、115-116頁。

193 柳田1998(1934)『全集』8巻、39-40頁。

194 柳田1998(1934)『全集』8巻、42頁。

195 柳田1998(1934)『全集』8巻、42-43頁。

196 柳田1998(1934)『全集』8巻、51頁。

197 1935年の「国史と民俗学」でも、「民俗学の本来の任務は眼前の社会の生活諸相の中から、特に異色のあるものを抽出して、其来由を究むるに在ると説く人が外国にも有るが、是は俗説弃時代の遺風であつて、やゝ狭隘に失した定義かと思はれる」と述べている(『全集』14巻、126頁)。「国史と民俗学」では伝説の史的意義から道徳律の進化を説いている。

198 1937年の講演「今日の民俗学」では、フレーザーの『旧約聖書のフォクロア』を「イスラエル人の昔の普通の生活をしらべて居ると紹介するだけとなっている(『全集』29巻、364頁)。

199 柳田のマリノフスキからの影響は、川田稔「柳田国男の思想的な研究」未來社、1985年に詳しい。

200 柳田2015(1990)『全集』35巻、12頁。

201 柳田2015(1990)『全集』35

への好奇心が潜んでいたことは、『民間伝承論』では以下のように、盛んに誌されている。

民間伝承の蒐集者の態度も、初は個々の土俗誌家と同じく、一小地方を限り其中で遭遇した稍奇異の見聞を片端から記録保存しようとした……斯かる珍奇は一つの法則の露頭、少なくとも曾て存した大なるものの痕跡である¹⁹³(傍点引用者)

斯く考へると資料の採集も、勢ひノルマルな現在の生活に調和せぬものをということになって、自然珍奇なものの奇妙なものを心を掛けるようになるが、それは邪道である¹⁹⁴(傍点引用者)

要するに必要な範囲を研究の目的で定めることである。珍奇、異状、変態のみを求めるとは不可である¹⁹⁵(傍点引用者)

我々の知らうとする凡人常民の葬制、埋められる方法などは調べる為の古文書なんかは皆無である。……昔風の史学家ばかりならよいが、新しい意識を持つた人までが、稀有なる資料で研究しようとし、珍奇を誇らうとする傾向があるのは、慨歎に堪えぬところである¹⁹⁶(傍点引用者)

ほんの一部を例示したに過ぎないが、珍奇を禁ずるという注意を促した文脈であっても、これだけ珍奇¹⁹⁷という言葉が現れてくると、民俗学に本源的にそれが内在するのだと、読者に受け取られることを、柳田は第一に恐れたのではあるまいか?『民間伝承論』の冒頭の「飛んでもない処まで進出して居らしい」という表現にみるように、1920年代半ばには「民俗学」の名を冠した書物はエロティックな匂いを漂わせるものが多かった。その流行が終息してからも、古代に偏したものや随筆的なものなどから、「科学としての民俗学」を盾に、民俗学を純化するために採った一つの手段が、『民間伝承論』の厳正主義だったといえる。

日本民俗学の形成期においては、したがって、それが必要だったが、のちにはそれを言明することが不要になるとともに、「フォクロアとエスノロジーとの婚約」¹⁹⁸といった内容は、学史としても古臭いものになっていた。B. マリノフスキ¹⁹⁹に関して、1937年の「日本民俗学講義」では「最近の……マリノフスキの如きはその言葉のニュアンスの感じまで知らねば彼等の生活の内面は判らぬといつてゐるが、今迄のはこんな良心的のものではなかつた」²⁰⁰とか、「Ethnographieにも非常な進歩が生じてゐる。……現在マリノフスキなど決して未開人の歴史など無視しては居ない」²⁰¹といったよ

うに、たびたび彼への言及が繰り返された。最先端の人類学を吸収し、それを著作にこのように反映できたのは、時間的にも限られていた。

これに加えて第二には、『民間伝承論』はそれまでに見られたような、エスノロジーを一元的に「民俗学」と称するような痕跡は、一切残されていない。エスノロジーへの積極的な発言は控えられ、のちには「あちら」と言うように客体視されていくが、『民間伝承論』はいわばエスノロジーとの距離が置かれる直前の過渡期の状態を映している。言わずものがな、「フォクロアとエスノロジーとの婚約」というフレーズも、柳田自身の口から漏れたかもしれないものの、後藤による涉猟の結果という可能性が高い。なぜなら、これまで引用してきた民俗学が珍奇を求める好奇心を母胎にしたといった言説は、いずれも『定本』には掲載されなかった第2章以降に現れてくるからである。

第三に総括するならば、石田の「時にして先生の日本民俗学の目標がどこにあるのか判断を迷わせる因となったばかりでなく、先生自身もまた、自己の中のしばしば相矛盾する傾向の前に、『わが胸に二つの魂住めり』といったファウスト的悩みに苦しんだのではないかと思われる」²⁰²という指摘が意を尽くしている。1925年の段階では、柳田の言うところに従えば、「郷土研究といふ総称」=フォクロア+「私たちの学問」+他の関連諸科学であった。これに加えて「私たちの学問」=「歴史民族論」+「史的特殊性」+「切実なる問題」だったはずの等式は、1930年から40年代になると、「日本民俗学」=フォクロア+「歴史民族論」+「史的特殊性」+「切実なる問題」にまで振れている。

「民俗学」という一元的な呼称に、エスノロジーをも包含させていた1932年までは、少なくとも「切実なる問題」は、その接続可能性を探る目当てであって、弁別される領域に留まった。「日本民俗学」と日本を付して語られるようになると、併行して腐心専念された民俗語彙の膨大な蓄積と整理とも相俟って、柳田の見通しと自信は深まり広がって、境界線が微妙に揺れ動いた。ついには「日本民俗学」という総称は、フォクロアを遥かに超えた現代科学として設定される。『民間伝承論』はそのような揺れ動く直前の、アカデミックな「学」的な範疇の議論だったといえる。

1955年の民俗学研究所の解散宣言も、民俗学の現状を「奇談・珍談に走り過ぎる」²⁰³と慨嘆したとされる1960年の生涯最後の講演「日本民俗学の退廃を悲しむ」でも、アカデミックな問題と実践的課題との間を柳田の論議は大きく振幅する。柳田晩年の弟子・千葉徳爾が、その最後の講演をアカデミックな意味での学問ではなく、「政策」だったと解釈²⁰⁴し、退廃の原因も「民俗研究と政治的着眼ないし発想とをかかわらせる方法を自らの直観に頼って、凡百の研究者に民

巻、23頁。この文章の前に「かういふ生活が明治の始めまで伝った。ほんたうの照明史を作らんとするなら絵巻物の事例だけで行かぬことはこれでも判る。記録に残つてるのは貴族の生活のみである。葬制婚姻等皆然り、日本民俗学への要望が民族学へのそれと全く異なることはこの一つでも判る。かりに照明に対する100%の熱望を持った外国のEthnographieが日本に上つて来ても日本は大部分電気なりと報告する外何もなし得ない。うそではない。然し我々はそれで満足は出来ぬ」と述べている(『全集』35巻、22頁)。

202 石田前掲1、1965年、142頁。

203 柳田2015(1992)『全集』35巻、135頁。『朝日新聞』1959年12月14日付の記事「こと『民俗学』となるとシには見えぬ元氣——柳田国男氏の近ごろ」にも、「近ごろ民俗学が世間に流行しすぎたせいか、どうも定義があいまいになってしまった。みんな勝手な定義を下して勝手なマネばかりしている。……折口君(故折口信夫氏)あたりも古い芝居などを民俗学の中へ引きこんだし、池田君(池田弥三郎氏)などもちがった方向を歩いとるようだ。民俗学をもういちどテコ入れせにゃならん」と述べている(『全集』33巻、364頁)。

204 千葉徳爾「伊那谷の民俗の回顧と展望」『伊那民俗研究』3号、1992年、48頁。

205 千葉徳爾「柳田國男・民俗学への“遺言”」『伊那民俗研究』3号、1992年、14頁（1992年8月12日付『読売新聞』の再録）。

206 家永三郎「柳田史学論」『日本の近代史学』日本評論新社、1957年、114頁。

207 柳田1998(1946)『全集』15巻、105頁。

208 管見の限り、その後の研究においても、横地留奈子「利根川下流域における盆の精霊棚の一例」『人文地理学会大会 研究発表要旨 2011』、2011年ぐらいしか、これに注目したものはいない。

209 柳田2000(1918)『全集』25巻、306頁。

210 家永前掲204、115頁。

211 柳田1998(1946)『全集』15巻、150頁。

族政策への方途を開拓する道を説かなかったことだ²⁰⁵と論じざるを得なかった。家永三郎の喝破した詩人柳田という「一天才の個人芸に過ぎない」²⁰⁶という評を想起する。

例えば『先祖の話』（1946年）などを読むと、絶大無数の民俗語彙を集積し、整理し尽くした柳田は、その地平に立って、それらを縦横無尽に駆使し、その差異や微妙なズレのなかに、既に意味の不明になった平民の過去の生活の「痕跡」を的確に抉り出す。『先祖の話』には両墓制の紹介に続けて、第二の単墓制の結果、「一方には又我々の先祖祭の方式をやゝ不明にした」という文脈の中で、「同じ関東の平野の間でも、今なほ墓前に簡略な棚を設けて、盆には参ってほかひをする村が有る」²⁰⁷と述べている。「仏の腰掛け」「真菰膳」あるいはガラガラと呼ばれる利根川下流域に分布する微かな習俗²⁰⁸であるが、それにも論及を怠らない、方法に忠実で、「学」に厳格な柳田がそこにいる。極めて些細な習俗の断片さえをも、個別的な民間伝承の研究に留めるのではなく、その微細な断片を重ね合わせ、繋ぎ合わせることで、「平凡人の平凡生活」²⁰⁹の全体像を再構成しつつ、心持ちも含めた変化のプロセスを明らかにしようとしている。それはしばしば日本人の来し方・行く末の「切実なる問題」に応えるものともなっていた。

「新たなる国学」の建設を唱えた特に戦後において、この「切実なる問題」は、学問としての現在と将来に対する実践意志の、まずは表明であった。そうだとすると、これを削ぎ落として「学」は存立するのか。家永が「史学の生命は、一方にはその実証性にあると共に、他方には実践的意志の如何、云ひ換へれば思想的基礎の如何にかかっている」²¹⁰と論じたように、独り民俗学だけの問ではないとするならば、それを差し引いた、「日本民俗学」=フォクロア+「歴史民族論」+「史的特殊性」という等式による、科学としての成立の存否が問われてくる。紙幅もない本稿ではそこまでの検討はできないが、フォクロアの範疇であった狩猟伝承研究の域を超えて、千葉が『たたかひの原像——民俗としての武士道』（平凡社、1991年）や『負けいくさの構造——日本人の戦争観』（平凡社、1994年）を著したように、普遍的な科学としてのフォクロアとは次元を異にする、「日本民俗学」を設定することができるか否かという問題である。

たぶんそれは可能だろう。しかしながら、その『先祖の話』において「もう一度固有の生死観を振作せしめる一つの機会であるかも知れぬ」と述べながらも、「それは政治であつて私たちの学問の外である」²¹¹と柳田がいうとき、私たちがファウストの苦悩を共有せざるを得ない隘路に陥る。ひとまず、千葉の柳田評価と仕事に賛意を表したところで、筆を擱きたい。